



第 91 号

公益財団法人 黒田奨学会

相手の立場に立つ ― 知識を知恵に ―

黒田奨学会賛助会員 (自称)
竹下 政雄

私は医療系専門学校において非常勤講師をしており、「表現法」という講義を受け持っている。近い将来、医療従事者になるであろう学生たちにとっては、臨床的な現場においての言葉遣いや表現の仕方など、常識としてはもちろんのこと、知識としても修得しておく必要があると考え、講義を行っている。

今回、医療従事者を目指す1年次の50人の学生（年齢18-28歳、大半は18歳）を対象とした後期の授業で小論文の課題を出した。テーマは、彼らには避けて通れない重要な「『相手の立場に立つ』ということ」である。

「相手の立場に立つ」とはどういうことなのか、彼らが考えている内容は次のとおりであった。



- 相手の気持ちを理解し、共感、判断すること（46%）
- 相手が考えていることや求めていること的心情を考え、思いやりをもって対処、行動すること（34%）
- 相手を大切に思ったり意見を尊重したりして、相手に寄り添うこと（14%）
- 自分や物事を客観的にみること（14%）
- 自分を相手の立場に置き換え、相手の状況、状態や求めていることを把握すること（10%）

いずれも概括的で、具体的行動に直接結びつかないような内容であった。

次に、「相手の立場に立つ」ことを具体的に考えさせるために、「はがきを書く」という活動を取り上げることにした。

はがきや返信はがきを書くということは従来では誰もが日常的に経験したことであるが、最近はスマホの影響もあってか、はがきのやり取りといった習慣は消えてしまった感がある。ましてや、事務的な連絡はしても相手の立場に立ってはがきを書くなど、あまり考えない状況である。そこで学習材として「返信はがき」を取り上げた。

卒業した中学校の同窓会開催を知らせる縦書きの往復はがきの返信が今回の学習課題（図）である。返信用のはがきには、表面は「合同同窓会実行委員会 行」となっている。裏面は、「第50回卒業生合同同窓会に」、「御出席」「御欠席」（該当するものを○で囲むよう指示）、「発信日」、「御住所」、「御芳名」、「お電話」、そして「御返事は、10月15日必着でお願いします。」と印刷されている。

この返信用はがきに、同窓会開催の当日は在学している学校の行事で出席できないことを、学生がどのように伝えればよいかという条件を設定して書かせた。

まず、表面である。学生の84%が「合同同窓会実行委員会 行」の「行」を2本の縦線で消し、「御中」と記入していた。16%の学生は表面はまったく手をつけていなかった。

次に裏面。「御欠席」の「御」を消して「欠席」を○で囲んでいた学生は66%、「御欠席」を○で囲んだ学生は18%であった。そして4%の学生が「欠席」の前に「残念ながら」「申し訳ありません」と書き入れており、6%の学生が「欠席」の後に「します」「いたします」と付け加えていた。欠席の理

由を書いた学生はいなかった。なお、16%の学生は「御出席」を2本の縦線で消しただけであった。

さらに、「御住所」の「御」を消した学生は58%、「御芳名」の「御」だけを消した学生は38%で、「御芳」を消した学生は26%であった。そして「御芳」を消した後に「氏」あるいは「前」を付け加えた学生が10%存在した。「お電話」の「お」を消した学生は44%であった。

結果を学生たちに板書させながら、いくつかのことを確認していった。まず、「相手の立場に立つ」ためには、表面は「行」を2本の縦線で消して「御中」とすること。裏面では、「御欠席」の「御」を消して「欠席」を○で囲み、「欠席」の前に「残念ながら」あるいは「申し訳ありませんが」、後に「します」または「いたします」を付け加えること。欠席の理由を書き入れること。さらに、はがきの初めに「御案内ありがとうございます。」、終わりに「御盛会のほどお祈りいたします。」を付け加えること。「御住所」の「御」、「お電話」の「お」を消すこと。「御芳名」は「氏名」もしくは「名前」とすること。そして、締切りに遅れないように、少なくとも締切り日の3日前にまで投函することが必要であることを確認させた。(図)

こうした学習活動をとおして、学生たちは案内状を送ってくれた実行委員会の立場、相手の立場に立つということを具体的に理解してくれたと思う。

そこで、再度「相手の立場に立つ」ことについて思ったこと、考えたことを書くように指示した。学生たちが書いていた内容は、

- 相手を、気持ちよくする、穏やかにする、嫌な気分させない、不愉快にしない、など相手を思い遣り、配慮すること (94%)
- 相手を自分より上の存在と考え、相手を敬い、敬意を示し尊重すること (72%)
- 相手に対して感謝の意を示すこと (24%)
- 相手の気持ちをしっかり考えること、相手の思いを返すこと、相手に気持ちよく伝わるかを考えること (6%)

などであった。返信はがきを書くことで、相手の立場に重点がかかった視点が強く表れたとみることができる。

90分の授業時間が5分を残すだけとなった頃、私は「相手の立場に立つ」という見地から、他の場でそれがどのように応用できるのかを知りたくて、「要望・質問等」を書かせてみた。相手の立場に立つ考え方ができれば、広く社会生活に活かせると考えたからである。

その結果、学生の6割が質問・要望等の欄に記入しており、その中で「お手数ですが、・・・について御指導をお願いします。」、「お忙しいと思いますがよろしくお願いします。」、「詳しく教えて

課題のはがき

表	裏
第五十回卒業生合同同窓会 御出席 (2本の縦線で消す) 令和 年 月 日 御住所 御芳名 お電話 ※ 御返事は、十月十五日必着でお願いします。	814-1234 福岡市東区西陣三丁目二番一号 福岡市立西陣中央中学校第五十回卒業生 合同同窓会実行委員会 行

返信見本

表	裏
第五十回卒業生合同同窓会 御出席 (2本の縦線で消す) 残念ながら、お祈りいたします。 御住所 御芳名 お電話 ※ 御返事は、十月十五日必着でお願いします。	814-1234 福岡市東区西陣三丁目二番一号 福岡市立西陣中央中学校第五十回卒業生 合同同窓会実行委員会 御中 特

くださいますと、ありがたいです。」「教えてくださいとうれしいです。」などの言葉がみられ、人の立場に立って気を配り、相手に対する思いやりの気持ちを具現化していることが伺えたのである。

加えて、「相手の立場に立つことがこんなに大変だったとは思いませんでした。」「はがき1枚の書き方にも、相手の立場に立つということを捉えることができます。」「返信はがき一つとっても、相手の立場に立つことは難しいことです。もっと相手のことを思い遣ることに努めたいと思いました。」「はがきの書き方はしっかりと知っておかないといけないことなので、とても勉強になりました。普段から相手の立場に立って考えることを意識して生活したいです。」「返信はがきを書いてみて、今まで私が考えていたことは、相手の立場に立てていなかったということに気付きました。」「相手の立場に立つということは、人と人との関係をよくして気持ちよく過ごすためのものであることがわかりました。」などのうれしい感想を読むことが出来た。

また、質問・要望等に記載がなかった学生は「特にありません」、「ありません」、「特にないです」、「ないです」の記入であった。

こうして、返信はがきを書くことによって学び取った知識を、社会生活に活かそうという意識を持ち始めていることが捉えられたのである。

一方、残り4割の学生は「質問・要望等」の欄には一言も記入していなかった。相手の立場に立つのであれば、何かなければせめて「ない」、あるいは「なし」くらいは記入してほしかったところである。知識として理解していても、それを他の場や状況に接してどう活用するかということにまで意識が及んでいない状況であった。

それは、「日本人って何が面白くて、こんな面倒くさい文化を産み落としたのだろうか。」という感想を持った学生がいたことから考えても、現代社会の一面を表しているのかもしれないと思わせられた。

ここまで授業の一端を述べてきた。黒田奨学会の皆さんは、この状況をどのように捉え、どう考えたのだろうか。

黒田奨学会の皆さんには事務局から各種の報告等の提出依頼があることと思う。その際、今ある自分は自分一人の努力の結果だと思い込んだり、相手に対する思いやりが見られなかったりするようなふるまいは、決してなかっただろうと思っている。まして、報告期日に遅れたり忘れたりするなど、礼を失するようなこともなかったと確信している。

相手の立場に立って報告すること、それは回りまわって皆さんの将来に関わってくることである。事務局の担当の方が一段と力を込めて諸活動に取り組んでいらっしゃるの、皆さんの最大級の活躍を願っているからこそそのことである。これからも、事務局の担当の方々を不安に思わせたり気分を害させたりするようなことがないように心してほしい。

これから様々な知識を身に付けていかれることと思うが、その知識を知識だけに留まらせるのではなく、相手の立場に立って社会生活に活用していくように努めてほしいものである。相手の立場に立って、細かく気を配って‘なさけ’をかけることを意味する語は「恵」であり、相手あつての「恵」である。「知」と「恵」とを結び付けた、いわゆる「知恵」として働かせてほしいものである。

先行き不透明な現代社会を生き抜く力の源になるのは、「知恵」にほかならないと考えるからである。

黒田奨学生の皆さんのこれからの大いなる活躍を心から祈っている。

竹下政雄氏 略歴

福岡県立福岡高校および福岡学芸大学（現在、福岡教育大学）を卒業後、1959年から国語科教員として中学校や県教育委員会に勤務し、中学校校長を経て1997年定年退職。教育センター嘱託専門員、福岡大学や福岡国際大学の非常勤講師を経て、現在、医療系専門学校の非常勤講師として勤務。

目 次

巻頭言 相手の立場に立つ ― 知識を知恵に ―

黒田奨学会賛助会員（自称） 竹下 政雄

理事退任のあいさつ 1

トピックス

第 15 代黒田家御当主の黒田長久様ご夫妻の懐かしい写真 4

末田奨学生、「九大キャンパスで輝く工学系女子」の

一人として紹介される！ 4

松下陸君が司法試験合格！ 5

「外交官を目指す心得」として「外交官」を囲む会が開かれました！ 5

海外留学&研修報告 7

特別寄稿

福岡藩（黒田家）由来の教育機関の変遷（7） 最終回 8

初の企画 ― 奨学生の近況報告 ― 14

初の企画 ― 奨学生のエッセイ ― 17

黒田奨学会の奨学金支給制度拡充について 20

コラム 21

行事報告

令和3年度 第1回九州地区研修会 21

令和3年度 第2回九州地区研修会 23

令和3年度 関西地区研修会 25

令和3年度 第3回九州地区研修会 27

令和3年度 第4回九州地区研修会 28

公益財団法人黒田奨学会に対する寄付御礼 および 寄付継続のお願い 30

平成 30 年度奨学会基金への寄贈者 30

編集後記 31

黒田奨学会研修会・発表抄録集 32

理事退任のあいさつ

長年、黒田奨学会の理事として奨学会を世話され、また奨学会発展のためにご尽力頂きました3名の理事の方々が令和3年6月をもって退任されました。

退任に際してお言葉を頂戴しましたので掲載いたします。

★ 馬頭 徹夫（元・副理事長、1992.4.27～2021.6.30）

この度、理事を退任するにあたり、お世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。

私が理事を拝命した平成4年は、当奨学会の財政が略略安定し、奨学生数も少しずつ増えている時であった。

長徳重理事長、後の副理事長目加田さくを先生、各務章事務局長（前理事長）をはじめ、理事・監事等の役員には錚々たる顔ぶれが揃っていた。特に各務先生は、長らく事務局を守ってこられたことから、会の運営一切を仕切っておられた。当会唯一の財源であり、黒田家から戴いた城外別邸跡地を更地として死守してこられたからこそ、今の奨学会があるのである。また、先生は教育界の人らしく、学生たちを叱咤激励する一方で、伸び伸びと育てられた。そのためか、各界でトップクラスとして活躍するような人材が生まれている。創立以来の基本である「報恩感謝の精神」は今に生きているのである。

私は理事として、瑞藤会会報、一日バス研修旅行、関東・関西地区研修会の企画・運営等を任せて頂いたことから、当時の思い出が次々と走馬灯のごとくに浮かんでくる。その中から一つあげれば、関西の研修会についての思い出である。

当初は、早朝出発の日帰り、「高野山黒田家墓地の清掃と参拝」が主たる目的であった。南海電鉄難波駅から特急「高野」に乗り、約2時間半の車中で学生の個別指導を行っていた。ある年、台風の直撃により登山の手段が無くなったので急遽変更して学生をホテルに集め、学習発表会をすることにした。突然のことで学生は戸惑っただろうが、やってみると立派にできた。それまで、相互の交流がなく、「隣は何する人ぞ」だった学生たちには「刺激になって良かった」と好評であった。

このことが発端となり、現在の研修会へと発展したのである。この模様は後に新聞・TVの取材を受けることになった。当会はやがて立派な公益財団法人にまで成長した。

現・伊達理事長のもとに「財源の活用」を進めて、全国でも比類なき奨学会となっている。

かつて黒田家が幕末から明治にかけて英才教育に力をいれ、その結果、我が国の政・財・産業・工業、そして教育界にも実績を残す巨人達を世に送り出した（本会百周年記念誌を参照されたし）。

当奨学会はこの精神を受け継いでいる。奨学生諸君が志を持って、次世代のリーダーとなるべく育っていくことを念願し、当会の今後益々の発展と充実を期待するものである。

（昭和32年度～35年度 奨学生）

★ 久保田 康史（関東地区担当理事、1992.6.5～2021.6.30）

私は平成4年6月に黒田奨学会の理事に就任しました。当時46歳の若輩でしたが、今年6月の退任時には馬頭先生に次ぐ高齢者となっており、月並みながら年月の経つことの早さに驚くばかりです。

在京の理事としての役目は、平たく言えば関東地区に進学した奨学生のお世話ということですが、当初は具体的にどういうことをするのかもよくわかりませんでした。しかしそのうち本部からのお勧めもあり、年2回懇親会を開くようにしました。

懇親会の最初は、私の所属する法律事務所の会議室でコーヒーとケーキ程



令和元年度卒業式で



自宅でのくつろぎ

度で自己紹介や簡単な近況報告です。その後、新橋駅前の「新橋有薫」というちょっと雰囲気の良い居酒屋に移ります。この店は、福岡の久留米から進出してきており、新鮮な刺身やおきゅうと、がめ煮などを提供してくれます。また、「高校ノート」という各高校毎の一種の連絡帳があって、来店した卒業生は、名刺を貼ったり、自己紹介や近況報告の文を書いたりします。この「高校ノート」は、何千冊にもなり、新聞やテレビで有名になりました。ここでは、アルコールのお蔭もあって、久しぶりに会う奨学生は、お互いに打ち解けて盛り上がりつつありました。

私は法学部出身で弁護士という仕事をしており、理系の奨学生の相手はうまくできていない感じがしたので、途中から東大工学部出身で、経済産業省にお勤めであった野中哲昌君に理事に就任していただき、理系の奨学生の相談相手になっていただきました。その後、野中君は関西に転居されたので、東工大出身の建築家、野上真太郎君に御協力をいただきました。この会は普段慎ましい生活をしている奨学生には好評だったようですが、近年のコロナのために開催できなくなったのは誠に残念です。

また、公式行事としては、毎年12月に開かれる研修会が重要なものですが、これも本部の研修担当の理事の方が中心になって準備されるので、私は当日出席して、主として文系の奨学生の発表に少し質問をする程度の役割でした。高校時代から数学・物理が全く不得意だった私は、理系の諸君の発表は理解できないことがほとんどでしたが、彼らが目を輝かせて自分の研究の成果を発表する姿からいつも大きな元気をもらっておりました。

在京の奨学生は、総じて真面目で勉強に励んでいる様子でしたので、その点は余り気を配らずに済みました。ただ、地方から出てきた学生全般の傾向として、科目の選択、勉強の仕方や進路先についての情報がどうしても不足がちと思われましたので、文系の人達に関しては、その点をカバーしてあげたいと思っておりました。何人かの奨学生には、先輩を紹介したり相談に乗ったりはしましたが、全体としては、わずかな範囲であり、心残りが致します。

私は育英会事業全般について詳しく研究したわけではありませんが、総じてどの育英会も財源の確保に苦勞されているのではないかと思います。しかし当奨学会は、黒田家が「浜の町黒田家別邸」の土地（1,419坪）という優良な資産を寄付されたことにより、奨学会の給付を続けることができ、また先年には、伊達理事長他本部の理事の方々のお骨折りにより、土地の賃貸借契約が成立して安定した収入源を確保することができました。

また、黒田家におかれましては、長高様の御長女絢子様が先年御結婚され、ご安泰の様子とうかがわれます。このような状況の中で退任できますことは、誠にハッピーリタイヤーという以外にありません。

最後に、私事に涉りますが、私は昭和43年に大学を卒業し、昭和45年から今日まで弁護士として過ごしてきました。この間、比較的平穩に、また、自由な生活を続けられてきたのは、ひとえに在学中黒田奨学会から奨学金をいただき、勉学に専念できたことのお蔭です。奨学会とこれを創られた黒田家に対して、改めて心からお礼を申し上げます。

(昭和39年度～43年度 奨学生)
(2021年10月記)

★ 久野 修資 (1995.10.7～2021.6.30)

秋も深まってまいりました。

黒田長高様、ご一家の皆様 ご健勝のこととお慶び申し上げます。

黒田奨学会の皆様、元気にご活躍されていると推察しております。

私は黒田奨学生としてお世話になり、この度理事を退任いたしました。黒田総裁、奨学会の諸先輩の皆様には、学生時代、卒業後もお世話になり、ありがとうございました。感謝の気持ちで一杯です。

昭和39年に黒田奨学生に採用され、第1回目の会は、当時理事長をされておられた水月文英先生と筑紫女学園高校の職員室で新奨学生数人とストーブを囲んでの100周年記念式典で会でした。水月文英先生より黒田奨学会の説明、奨学生としての態度、卒業後の社会への還元のお話



があり、この時、大学生としてスタートした自覚、感激を鮮明に覚えております。九州大学入学後は勉強、読書は充実していたと思っておりますし、好きなサッカーで十分に体力向上に努めました。時々、黒田奨学会の先輩とお話できる会は楽しみの一つでした。会では現在の生活状況を報告し、先輩より楽しみのある進路、夢を持つ希望、時には問題点の指摘を受けた事もありました。

ただ残念な事もありました。現在の学生生活では考えられない学園紛争（大学紛争）を経験しました。勉強もせず、ストライキがあり、批判、非難の毎日の連続でしたし、私自身、考え、模索し悩んだ時代でもありました。数か月に及んだこの時期は勉強もせず、友人関係も壊れ、虚しさだけが残りました。学ぶ時間の大切さを痛感しております。

もう一つ、残念な事がありました。大学の友人がある宗教に入信し、学生の本分である勉強も辞め、活動を行いました。何度か話をし、学園生活に戻るよう努力しましたが、できませんでした。最後は修行と称し、その最中に急死した事態に遭遇した経験から、今も職場で時々若い人とこのような状況に会う事がありました時に、私も参考にしてきた黒田奨学会の先輩の話をします。「皆さんは思想にはトレランス（寛容）を持ちなさい。良く勉強し、多くの本を読み、そして自分の考えを決めてください。」大切にしている御指導の一つです。

卒業後は内科に入局し、血液学を主体に研究、診療を行いました。奨学会の先生方と話をする時間は楽しみでもありましたし、また別の角度から見た考えは閉鎖的になりがちな仕事に幅を持つこともでき、新鮮な気分にもなりました。この間、血液学は革命とも言えるような発想の転換があり、治療、研究も変化していきました。激動の時代に精一杯努力もしましたし、自分の考えを貫く生活ができました幸せを感じております。

卒業後、奨学会理事会に加えていただき、仕事の一部を担当させていただきました。奨学生諸君の発表を聴く機会は楽しみでもあり、頼もしさを感じる時間でもありました。奨学生の考え方も変化しており、時代の流れに即応していく態度も重要と考えております。黒田奨学会理事会には多方面の職種の方が在籍されており、より良き学生生活のために尽力されておられます。役員の方のご努力により、私の育った時代よりはるかに大きな、広い勉強の環境が黒田奨学会には準備されておりますので、奨学生の皆様、自分自身で開拓し前へ進んでいってください。人生で最も感性豊かな十代後半から二十代前半にかけて、しっかりと教養を涵養し、楽しく充実した学生生活でありますよう、期待しております。

最後になりましたが、黒田長高様御一家の益々の御繁栄と黒田奨学会の発展を祈念いたしております。長い間ありがとうございました。

(昭和39年度～43年度 奨学生)



トピックス

第15代黒田家御当主の黒田長久様ご夫妻の懐かしい写真

瑞藤会OBの安部徹様（慶応義塾大・法学部、昭和63年卒）より月刊誌「東京人」（都市出版社）に掲載されていたという、第15代黒田家御当主の黒田長久様ご夫妻の写真を送っていただきました。貴重な写真ですし、当時の赤坂黒田邸を御存じの方には懐かしい写真ですので紹介いたします。



タイトルは「赤坂黒田邸から国会議事堂を望む」となっており、その注釈には下記のように書かれています。（原文のまま）

「長久はオースティンの助手としてGHQに勤務していた。長久の父長禮も鳥類学者として知られていた。オースティンと日本人鳥類学者とのかかわりを表す一枚。昭和23-24年。」

末田奨学生、「九大キャンパスで輝く工学系女子」の一人として紹介される！

九州大学工学部が発行した女子学生向け冊子「VOICES OF WOMEN IN ENGINEERING」に、本会奨学生で九州大学大学院工学府機械工学専攻、博士課程2年の末田美和さんが代表として紹介されました。この冊子は九大キャンパスで輝く工学系女子をクローズアップしたもので、比較的、男性中心であった工学分野において今後の女性の活躍を期待する意味が込められているようです。

末田さんは機械振動学の研究を行っており、「自己同期現象」を理論的に解析し、よりよい機械設計につなげていくことによって社会貢献につなげていきたいと語っており、黒田奨学会の「社会貢献」の理念をしっかりとアピールしてくれているのは嬉しいことです。

掲載の九州大学HPは下記の通りです。

https://www.eng.kyushu-u.ac.jp/script/wordpress/wp-content/uploads/voices_of_women_2021.pdf



九州大学HPより

松下陸君が司法試験合格！

本年3月に九州大学法科大学院法務学府を修了した松下陸君が見事、司法試験に合格しました。彼は学部3年次に大学院へ飛び級し、今回の司法試験も一発で合格という超優秀な奨学生で、学生時代には九州大学基幹教育賞を受賞しています。また、平成30年度の黒田奨学会入学式では新奨学生に対して「黒田奨学生であれば90点以上の成績は当然だ」と後輩たちに檄を飛ばしたこともあり、黒田奨学生の見本、模範学生でもありました。今後も「これこそ黒田奨学生」という理想的な姿勢を維持してくれることでしょう。社会貢献を実現するための益々の研鑽と活躍を祈っています。



平成30年度入学式で後輩への檄を

「外交官を目指す心得」として「外交官」を囲む会が開かれました！

令和3年9月21日、午後7時半より「外交官を目指す心得」と題して、瑞藤会OBであり、現在、韓国公使として韓国大使館に勤務されている中條一夫氏を囲んで、外交官を目指している黒田奨学生数名の参加の下、ソウル・東京・福岡を繋いでのオンライン懇談会を開催しました。

この懇談会は伊達理事長の発案によって企画されたものですが、中條氏には快く引き受けて戴き、御多忙中、韓国の盆休み（5連休）を利用しての開催となった次第です。

中條氏には平成27年の黒田奨学会百周年記念式典の際に「福岡から世界へ・グローバルマインドの鍛え方」というタイトルで記念講演をして頂き、語学力とコミュニケーション能力の違い、能力の鍛え方、グローバル人材に必要な資質等について非常に簡潔・明快に話して頂いた印象が強く残っていましたが、今回も予想に違わず、分かりやすくしかも説得力ある語り口に、筆者にとっては全く縁がなかった‘外交官’の中身に十分に触れることができました。

参加者

中條一夫（現・韓国公使）

松下陸（本年九大法学部卒、司法試験合格）

加治遼（一橋大学法学部2年）

渡邊蒼生（東京大学文I、2年）

森谷史人（慶応義塾大学法学部1年）

伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事

内容を紹介させていただきます。

中條氏が外交官を志されたのは高校生の時に英語教師の推薦で米国へ1年間留学したことがきっかけであり、それから世界への興味が広がり、ご本人曰く、



平成27年百周年記念式典で

「外交官になれば外れがない」と思ったということです。

外交官に必要な能力はまず英語であることはもちろんであるけれども、会話は語学だけでなく話の中身、プラス、度胸と、この三つがバランスよく生かされることが重要であるということ、また、度胸にはコミュニケーション成立への熱意が基盤にあることが大切で、さらに度胸を鍛えるための高度の負荷、すなわち大勢の人前で話したりするなどが求められるということです。

また、グローバル人材に求められる資質として、未知なるもの、異なるものへ関心を持つという‘好奇心’であり、加えて all or nothing を超えた多様性の許容、‘中庸の徳’も必要であると力説されました。

続いて、我々参加者の要望に応えられた形で、外交官の特権や家庭生活といった話題にも触れられ、なかなか普通には聞けない内容をも紹介して頂きました。そして、極め付きの最後は中條氏の趣味でもあり、先日出版された書籍「で

きるビジネスマンは日本酒を飲む*」へと話題が移り、「日本酒を仕事のためのツール、ビジネスツールとして使われた例が実はあるんですよ」と紹介されたのが、黒田奨学会に特に縁ありの‘黒田節’でした。そういえばまさにそうですね。

こうして素晴らしい‘オチ’も出たところで今回の懇談会は和やかなうちに終了いたしました。

中條様、ありがとうございました。改めてお礼申し上げます。

(岡本)

中條一夫氏 略歴

1990年 東京大学法学部卒

1992年 東京大学法学部政治研究科修士課程修了

1992年4月 外務省入省

1993年～ 大韓民国、米国、カンボジアなどの大使館勤務や内閣官房・内閣参事官などを経て、現在は大韓民国日本国大使・公使（後方文化院長）として勤務

中條氏著書の本を紹介します。

*「できるビジネスマンは日本酒を飲む」

—外国人の心をつかむ最強ツール「SAKE」活用術—

国際きき酒師 中條一夫

時事通信社 2020年発行

ご本人曰く、「見かけは酒の本ではありますが、『外国人に日本酒を勧めることは日本を勧めること』というテーマで、実は私の外交に対する考え方を酒にかこつけて語った本でもあります」とのことです。



懇談会に参加した奨学生からの礼状

昨日は中條一夫さんとの懇親会を企画していただき誠にありがとうございました。私は外交官を志しながらも普段外交官の人と交流し、仕事についてイメージを具体的に膨らませることのできる機会はあまり多くありません。今回は、黒田奨学会を通じ、現役の外交官から外交官を志したきっかけから具体的な仕事の内容まで、本当にたくさんの貴重なお話を聞くことができました。

印象的だったのは会話が「語学力」「話の中身」「度胸」という3要素の掛け算で構成されているというお話と、「何をやったか」だけではなく「な

ぜやったか」「どこまでやったか」という一連のストーリーを組み立てて、何事においても取り組むことが重要だというお話でした。どちらも、外交官という職業の枠を超えて、これからの人生を過ごしていく上で非常に大切な観点だと感じました。

今後も、黒田奨学会を通じて各界の様々な方と交流できる機会がありましたら積極的に参加したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

渡邊 蒼生（東京大学文I、2年）



参加者ギャラリービュー

海外留学 & 研修報告

東京外国語大学国際社会学部 4年 藤井 かのん

私は今年の8月末から、フィンランドのオウル大学に留学しています。この留学の最大の目的は、北欧の進んだ児童福祉や教育についてより深く学ぶ事です。オウル大学には以前短期留学プログラムで訪れた経験があり、その際、子を持つ親でも十分に学べる環境が整っている事を実感しました。そのため、この大学では授業以外からも学び取れるものが多いと考え、留学先として選択しました。

大学では人文学部に所属しており、フィンランドの言語、歴史、文学などの授業を受講しています。またそれに加えて、教育学部の授業も受講しています。そのうちの一つである「プロジェクト・ワーク」という授業では、3人グループで1年をかけて教育に関わるプロジェクトを立案、実行する事になっています。活動内容や対象に何の縛りも無く、自由度が高すぎるが故の苦労もありましたが、結果的に私のグループでは、4-6歳を対象に絵本を用いた「自然」にまつわる活動を行っていくことに決めました。まだ計画立案の段階で、実際に始めるのは12月以降になる予定です。

様々な授業に参加する中で気づいた事は、「自分の意見を言う事の重要性」です。ここの学生は意見が割れることを怖れていないように感じます。何も言わないで頷いているだけだと、「あなたはど
う思う?」とわざわざ聞いてくれます。たとえそこで私が違う意見を出したとしても、面白い意見として尊重してくれる事が多いです。今の私は英語で上手く伝えられないことを怖れて、積極的に自分の意見を言えないでいますが、今後は自信の有無に関わらず、まずは自分の意見を伝える事を意識しようと思います。

放課後や休日は、友人たちとカフェで編み物をしたり、ボクシングをしたり、フィンランド料理や日本料理を一緒に作ったりしています。オウルフィンランド日本協会という団体もあり、日本好きなフィンランド人と沢山知り合う事ができました。以前オウルにいた時に会った人々とも再会し、慣れない土地での生活をいつも助けてもらっています。

最後に、このような状況下での留学は、黒田奨学会の皆様のご支援が無ければ実現できませんでした。心より感謝申し上げます。実りある留学になるよう、目標や課題を見失わず、一日一日を大切に過ごしていこうと思います。



上左：建築学科のギルドパーティーで日本食を
振舞った際の写真（左、手前より3人目）
上右：近くの湖から見えたオーロラ
下：湖に浮くサウナ

特 別 寄 稿

福岡藩（黒田家）由来の教育機関の変遷（7） 最終回

黒田奨学会理事・事務局長 田中 崇和

瑞藤会の大先輩、金子堅太郎氏が、元福岡藩第11代藩主の黒田長溥公の意をうけて藩校「修猷館」を復活させた時の思いを、83歳時の1936年(昭和11)の6月、修猷館講堂における講演の中で述べられています。黒田長溥公の学校教育に対する強い思いと堅太郎氏の感謝報恩の念がよく分かる内容です。

講演速記録として残された資料を句読点などできるだけ原文のままで、ここに全文掲載し、4年間続けた「福岡藩(黒田家)由来の教育機関の変遷」をひとまず終了したいと思います。

なお、（ ）内の記載は田中による注釈です。

8. 金子堅太郎氏の藩校復活への熱い思い

「生みの親 修猷館」

子爵 金子 堅太郎

館長、職員、学生諸君、私は今回下県の際に館長(中学修猷館第10代館長古賀毅氏)のご依頼に依って本館に罷り出て諸君にお目通りをし、又何か一場の挨拶をするようにというご依頼でございまして喜んで今日参上致しました。

只今館長のご挨拶のお言葉に私は修猷館の生みの親というお言葉を拝聴致しましたが強いて館長のお言葉に反対はしませんけれども、修猷館が私の生みの親であって決して修猷館の生みの親ではないと常に念頭に記憶しておるのであります。私が今日の位置(講演当時子爵)において国家の為に多少貢献することの出来たのは修猷館の教育の結果であって即ち修猷館は私の生み親である。この修猷館のことに就いて詳しく申し上げますれば長い話だから簡潔に申し上げますが、この修猷館は元、上の橋の城門の外、堀端(中央区赤坂1-16-14)にあつて旧藩子弟の教育を司っていた。当時の教育は即ち漢書の教育、この学校の創設者は筑前の国主斉隆侯(福岡藩第9代藩主黒田斉隆)で天明年間(天明4、1784年)にお建てになった。最初福岡には二つの学校があつた。修猷館は東学問所といって、唐人町には西の学問所(「甘棠館」中央区唐人町3-3-2)、こういう具合に東西に学校があつて、東は朱子学、西は古文辞学、西学問所は亀井南冥先生が校長であつた。片一方東学問所は竹田校長(竹田定良初代総受持)であつた。ところがこの年、ちょっと年はわすれましたが(1798年)唐人町火事といって有名な火事があり唐人町が全部焼けた。その時、西の学問所が焼けた。私の子供の時(鳥飼在住)などは学校の礎石など残っていたが昨日通つて見ましたが何も無い。当時江戸幕府は朱子学以外は許さない(1790年寛政異学の禁)。その制度の下に筑前の西の学問所亀井派は遂に学校が再興せられなかった。それで修猷館のみ残つておつて旧藩士子弟の教育をした。即ち筑前の学問は朱子学であつてその他の学派は許さなかった。頼山陽などが筑前に来た時(1818年)などは亀井の一派(亀井昭陽)と多少は交際をして又詩文の交換などしましたが、朱子学派の者は一人として山陽に会っていない。あれは他の学派だということでは会わなかった。斯くの如くその流派の争いが学園にあつた。苟も青年子弟が漢学をしようと思えば修猷館に行くの他はない。それで私が修猷館に入ったのは九つの時(数え年)であつた。それより前に鳥飼の正木昌陽先生の家塾(不狭学舎、中央区今川2-8-20)に通うて論語の素読をして、それから段々大学中庸の素読が一通り出来るようになって九歳の年に修猷館に入った。それから修猷館で学問を致しました。

当時館長は竹田定簡(4代総受持)という人、後に忤の定猷(5代総受持)という人が館長となつて、そうして大勢の教員が漢籍を教授した。その頃の修猷館というものは階級制度があつて如何に学問が出来ても下役の子弟はどれ程優等の成績にあつても第二位にいる。中老、大組はとやかく及第しても試験の成績は第一位の成績にある。それから足輕(士分ではなく卒分)とかその他医者だの坊主だのの子弟が優等生であつても一番尻の方、そういう風に階級制度が非情なもの、校舎の入口でも違っている。上役の子弟は本玄関から入つて、只の武士の子弟は内玄関から上がつて、武士以外の書生は裏口から上る。その位階級制度が喧しかった。私などもその階級制度に非常に圧迫された(堅太郎氏修猷館入学の翌年父親死去。家督を相続するがも士籍剥奪、銃手組に編入される。後に銃手組の株を購入し4人扶持12石士分となる)。それでも学問する所は一ヵ所だから、そこに行つてそれから段々学問して明治の二年(1869年)に私は藩命を以て秋月に留学(藩校稽古館)、秋月から転じて修猷館に入塾し、明治三年(1870年)の冬更に藩命を以て東京の聖堂(湯島聖堂)に入学した。聖堂はご承知の通り御茶ノ水にある今の聖堂、あすこに行くのは今日でいえば洋行と同じ位のもので、学問を日本でして、アメリカとかイギリスとかフランスに行くのが仕上げ、そこを帰つて来ると博士になる。聖堂に行かなければ学問が完成せん。それで皆聖堂へ行つたものである。

明治三年(1871年)の冬東京に行つた。ところが聖堂は廃止せられた。漢学というものはもう必要ない。洋学でなければならんという。南校といって今の帝国大学(東京大学)の前身で、これは英仏語を教える。

東校というのは医者だけであつてこれは独逸語を教える。南校は英仏語、文学、理学を教えたもの

であります。私は仕様がなかったので伊予の松山藩の学者(藤野正啓)の家塾に行って漢学を学んだ。そうして明治四年(1871年)廃藩置県で七月には藩費が廃せられた。学問する費用がない。そこで私は再び東京に来る機会はない、もしこのまま筑前に帰れば多少の漢学の知識で以て村の子供に漢学を教える位で一生を終わらなければならぬ。そこで私は非常に窮した。学資はない。頼る人は無い。学問をしようとしても漢学の先生は無い。それで天下の形勢をつらつら考えると、もう修猷館で論語、孟子、大学、中庸、十八史略、元明史略、史記、左伝、詩経、書経まで読んで一通り必要な漢書は読んで見たから、もう漢書は沢山だ、今日は明治の世の中だ。廃藩置県で、もはや黒田侯は筑前の国主ではない。只の華族で東京にお住まいだ。われわれは筑前に帰ったところが頼る殿様がない以上は国に帰る必要はない。如何なる艱難苦勞をしても東京に踏み止って今日の世界の大勢を見るならば、どうしても英学でなければならぬと自ら決心して英学を学ぼうと思った。しかし誰に相談して良いか分からない。私のちょうど十九才の時、ここにおられる平山虎雄君(修猷館教諭)のお父さん(平野国臣の弟で司法省判事の平山能忍)、その人の宅に行った。

「私は漢学の生徒で東京に来たが私にはもう学資はない。しかし私は東京に留ってこれから英学をやる、そうして世界の大勢を研究して、わが国の国民である以上は何か国家の為に働きたい、私は国に帰っても仕方がないからあなたの所の学僕にでもよい、是非置いて下さい」と頼んで玄関番になって学僕をしておった。

その後、平山先生に頼んで平賀(1867年の第一回福岡藩海外留学生で司法省判事の平賀義質)の学僕になった。そうして毎日、司法省に弁当箱下げて跣足(はだし)で先生の後からついて行って勉強し、傍らエイ、ビー、シーを教わった。明治四年(1871年)の十一月になって黒田侯爵(長成公)のお父さんの長知侯(福岡藩第12代藩主)がアメリカに留学なさる(ハーバード大学)。その頃、黒田の老公長溥侯(福岡藩第11代藩主)、この人は非常な達見家であって、薩摩の斉彬侯(薩摩藩第11代藩主島津斉彬)などと所謂新知識のある方で欧米の学問を輸入しなければならぬという開国論者であった。

老公(長溥公)は早く世界の大勢をご覧になっておったから、自分の倅の長知をアメリカに留学させることは勿論、他に旧藩子弟の中から誰か若い書生を連れて行ってやるということになって、私と團琢磨がその選に当たって行くことになった。明治四年(1871年)7月たまたま岩倉具視公が欧米諸国に全権大使として行かれ(岩倉使節団)、その副使が参議木戸孝充、それから各所の俊才を集めてその総勢百十五人(通説では107名)、一船(蒸気船アメリカ号)を借切ってアメリカに渡るため、十一月十二日横浜を出発した。そうしてアメリカに着いて考えた。それは東京を出る前に老公が私にいわれるには、「今度アメリカに行ったならば、一つの専門の学校を選んで専門の学問をして来い。五年かかっても十年かかっても学資は俺が出してやるから安心してやれ。その代わり一つの専門の学問を修めて来なければ帰ることはならぬ」と、実に有難い言葉でありましたから、私はアメリカに行ったらアメリカの一番下から登り上げなければ本当の英語でない、今の日本の英語などというものは本当の英語になっていない。その頃でも福沢(諭吉)、中村(正直)あたりの塾で教えていることはいたが、通用せぬイングリッシュで、本当にやるならば小学校の一番最下等から段々段々上に登り上って小学校、中学校、大学に行くべきだと考え、私も団もボストンの小学校の一番ビリから上った。

エイ、ビー、シーからイット イズ レイニー、雨が降る、ア ドッグ ランズ、犬が走る、から始めた。私は先にいった通り、論語、孟子から始めて治国平天下の学問を日本でして、そのしたのが修猷館でした。で私は修猷館を私の生みの親といったのはそこであって、その学問をしっかりとやって

いる者が十二、三歳の小僧とエィ、ビー、シーからを一緒にしたのである。

小学校、中学校を経て大学法科(ハーバードロースクール)を卒業したのが明治十一年(1878年)、団は私と方向を変えて、鉱山学(マサチューセッツ工科大学鉱山学科)をやって同時に卒業したから、相携えて帰って来たのがその年の冬であった。こういう訳だから修猷館が私の生みの親で「修猷館」の三字は私の脳裏から決して忘れられぬ。私は今日演説も出来、文書もかけるが皆修猷館のお蔭である。それでアメリカから帰って来て役人になろうと思って種々運動した。しかし筑前人はなかなかそう容易には役人になれぬ。薩長(薩摩・長州)で政府をつくったから薩長でなければ人でないかの如く、薩長の玄関番ならすぐ奏任官(高等官吏。武官なら大佐から少尉)にする、筑前の者は判任官(下級官吏)にもせぬ。況や十年の役(西南戦争)には西郷隆盛に味方して天朝(朝廷)に鉄砲を打った賊(福岡の変)の藩の書生が、如何にアメリカから学問をして帰って来ても、あれは危険な奴だ、そういう者は役人にせぬ。どこに行っても通用せぬ。

他の奴は、どんどんアメリカ又はヨーロッパから帰って来てすぐ役人になるけれども筑前人はして呉れない。止むを得ず予備門(大学予備門、旧制一高の前身)という大学の予備校の英語の先生になって英語を教えた。教えた書生が今立派な者になっているが、私は英語の先生になって僅かに糊口を凌いでいた。

そういう具合で明治十二、三年(1879、1880年)頃は筑前人では役人にはなれない。就職難と今頃の学生らがよくいうけれども私どもの就職難に至っては言語に絶していた。

そういう具合に困難に接したが、幸に明治十三年(1880年)に知人の尽力で元老院の嘱託となり、元老院で働くようになった。明治十七年(1884年)に伊藤(博文)公に用いられて憲法のご制定に際し秘書官に任ぜられた。

ところがここに悲しむべきことは、ちょっと私は年を忘れましたが、明治十六年(1883年)頃に福岡県の中学校が悉く廃されてしまった。小学校だけは許したけれども中学校は皆廃した(福岡県には6中学校13分校あったが、1884年には財政難で、「福岡」、「久留米」、「豊津」の三校にまで減少)。教員は免職して書生は行き先がないという状況であった。そこで老公(福岡藩第11代藩主黒田長濤)は、「乱暴な県会だ己の子弟の教育をする所の学校を廃するとは何事か。わが輩は旧藩の子弟を洋行までさせて国に人物を作ろうとしておるのに、筑前の県会に於いて中学を廃するということは何事だ。わが筑前福岡の城下の子弟だけは中学校を与えたい。どうかして修猷館を再興したい」ということのご内命が(金子に)あった。それで文部省と相談して明治十七年冬二十八日の御用納めから翌十八年の八日までの時間を利用して、修猷館再興のため筑前に下って来た。

当時の県令は某(岸良俊介1882.05-1886.02福岡県令)、という鹿児島の人、それに相談した。筑前全体の中学校というと黒田家も余り財産もないから、せめて福岡の城下の子弟だけは中学校を与えよう。依ってその経費はすべて黒田家で引き受ける。教員職員の俸給から生徒の費用まで全部引き受けることにした。学校の名称も昔、斉隆侯(第9代藩主)の本校をお興しになった名を存して県立中学修猷館というものを興すというのが老公の思召しだから是非修猷館という名を付けて呉れと頼んだ。ところが文部省では、「福岡中学というものは許すけれども県立中学修猷館ということはいかぬ」という。それも段々経って、とうとう県立中学修猷館というものを文部省が許した(文部省役人の伊藤公の配下への忖度?)。それで県立中学修猷館ということになった(*1885年[明治18年]5月30日福岡県令より、英語専修学校である「福岡県立修猷館」の設置が告示される。同年9月10日開館)。

旧藩の学校名をそのまま取った中学校はこれ一つである。福岡第一とか第二中学とか、久留米中学、柳河中学とか地方地方の名はあるけども、修猷館という名で中学が許されたのはこれが初めてである。(＊柳川藩「伝習館」は1894年(明治27年)に名称復活。久留米藩「明善堂」は1889年(明治22年)明善の名称が復活。基山の「東明館」は、對馬藩田代領の藩校「東明館」と直接的な脈絡は全くない。)

それから老公のご趣意は今度修猷館中学を立てるならば、これから先はどうしても欧米の文明を輸入するに就いて英学は本当にやらせなければならない。英学に最も力を入れて教える。そうして日本の英学の先生じゃ本式の英語でないから、宣教師を教員に雇うて、本当の英語をエィ、ビー、シーからプロナンスェイションとアクセントの面からやって貰った。これは実に老公の達見であると思う。第二には漢学と国文を十分にやらなければならぬ。漢学と国文の力がなければ英語を読んでも翻訳することが出来ない。又数学というものはこれが頭を訓練するのに最も必要だ。修猷館は英語は完全な英語を教える。それから漢学も国文もやる、数学もやる。これが為に修猷館の第一回の卒業生(明治21年卒は大島、杉山、時枝、正木の4名)は非常に成績がよかった。ここの中学生がその後高等学校に行っても、ここの卒業生は殆ど全部及第して、入った生徒は皆成績がよいから優等生で東京の大学にも直ぐ入って皆修猷館の生徒は歓迎された。歴代の文部当局は、筑前の修猷館の生徒は、実に英語も漢学や国文も数学もよい、この三つが揃っているからして優等生が多い、天下の模範中学だという刻印を押しておった。そのことを老公に報告したら老公は非常にお喜びになった。この学校修猷館は、筑前の国主の斉隆侯が漢学の学校としてお残しになって、今日の中学校としては黒田長溥侯、われわれがいう老公という方の力に依って黒田家の私財で県会から一文も貰わず教育した。館長教員の給料皆黒田家から払うた。そうして段々来たところが非常に評判がよい。それと県会で反省するところがあってどうも中学を潰して置いてはいかぬということで、県会で中学をもとの通り県費で維持するということになり、それから各地方に中学を県会で中学費というものを決議して立てるようになった。

只、黒田家の修猷館は県会から一文も貰わず、こちらはこちらでやると頑張った。ところが県知事が「どうも同じ福岡県で黒田家の私財による修猷館に県立という名を付けては困る」といって嘆願したのでその故を老公に申し上げて、福岡県庁に引渡して県の費用で維持することとなった(1900年頃までは黒田家が学校経費を負担した)。

この学校の卒業生は非常に優秀な成績を以て高等学校や大学に入った。模範中学とまで文部省が刻印を押した学校であって、その学校にあなた方が入学して学問なさるということは今、館長がいわれる如く非常な名誉だと思う。私が生みの親というお言葉を拝聴しましたが、これは私の力では無くして全く黒田老公の賜である。如水公(福岡藩藩祖黒田官兵衛)の命日三月二十日と長政公(福岡藩初代藩主)の命日八月四日には崇福寺(博多区千代4-7-79)にお墓参りをなさい(現在、崇福寺裏黒田家墓所は福岡市文化財活用課の管理下で、土日祝のみ一般公開)。この修猷館の存立しておるのは全く黒田家の賜だから館長、教員は、生徒を引率して黒田家の始祖如水、長政公のお墓には参られるよう習慣を付けていましたが、年移り世が変わって今日それをしておるかどうかわかりません。恩を忘れるものは人間でない。この修猷館の今日存在しておるのは全く黒田老公の賜である。斯くの如く歴史有る修猷館、斯く演説する金子の如きはこの修猷館のお蔭で斯くの如き地位を得た(1900年男爵、1907年子爵、1938年伯爵)。

私がアメリカに行って法律学を学ぶことが出来たのも、この修猷館での漢学の力を付けたからこそで、もし漢学の力がなかったならば法律学の様な面倒な難しいものを理解する事が出来なかったであろう。即ち私は「修猷館」が生み出した一人である。修猷館は私の生みの親と今だに私は感謝しておる。

一昨日も当地に着して直ちに香椎の神社(香椎宮)、宮崎神宮、続いて崇福寺に行つて老公のご前に跪いて今日金子のあるのは全く黒田家の賜であると鴻恩を謝したのである(老公黒田長溥公の墓は福岡の崇福寺裏黒田家墓所ではなく、東京の青山墓園内の黒田家墓所にある)。謝恩のない人間は人間でない。私は一生、生きている間は黒田家のご恩を忘れぬ。私は、今日各所の学校から来て呉れと頼まれるけれども他の学校とは関係ないからお断りするが、修猷館だけは進んで来て講演するのである。

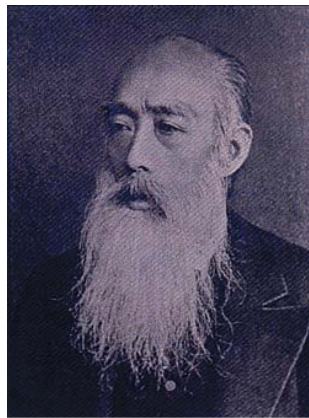
この修猷館は旧藩主黒田斉隆侯の創立である。そうして廃藩置県(1871年)で潰れた。而して又十六、七年後、県会が否決して中学校の無くなった時に、老公が再建になって旧藩時代の学校の名を存して修猷館とお付けになったが、修猷館は私の生みの親で今日出て皆さんに斯く歴史を申すのは、もう私も八十四(数え年)だからいつ死ぬかも分からぬ(89歳で死去)、このことだけは館長、教職員及び諸君に話して、明治十六、七年の中学教育が福岡に於いては廃滅になっておった時にも黒田老公のお蔭で修猷館だけは潰れずにすんだ歴史を知って貰いたいためである。

私は今日あなた方に向つて修猷館の成り立ちを話した。そうして老公の思召しを以て英学、国漢、数学、この三つの学科を十分やって将来有望な人物になって貰いたいと思うのである。果たして今の修猷館が中学の模範であるや否やを私は実状を窮めませんから分かりませんが、そういう一時は赫々たる名誉を文部省も認めておったが、そこに学ぶ諸君は昔の名誉と歴史を辱めないように日本第一の学校の在学生として、精神も確かである、学問も十分である、そうして将来国家有為の人間になるという決心を以て学ばれんことを希望して今日のご挨拶に代えたいと思います。

*上記の講演内容は「修猷館物語、昭和27年(1962年)修猷通信発行」に掲載されたものです。



藩校設立 黒田斉隆公



藩校再興 黒田長溥公



黒田奨学会設立 黒田長成公



藩校再興 金子堅太郎

初の企画 — 奨学生の近況報告 —

今号では、初の試みとして奨学生の近況報告を掲載することにしました。奨学生には毎月の奨学金振込の確認メールと併せて、ひと月分の近況報告もメールすることを依頼しております。簡単な2-3行のみの近況報告を送ってくる奨学生が多い中、勉学のことだけではなく、日常生活の中で起こったことや感じたことを鮮明な描写で送ってくれる学生もいます。



この6月から9月に送られてきた近況報告の中で非常に印象的であった近況報告を抜粋してここに掲載します。黒田奨学生の生活や日頃の考えなど、その一部を知っていただき、瑞藤会の仲間として共有感を味わってもらえればと思います。

● 関東地区在住 修士1年

先月までと同じく、週のうち4日間は研究を行い、1日はインターン先に出勤するという日々でした。研究活動は、自分で設定した画像認識課題に対するアルゴリズムと、その計算に特化したハードウェアの構造に対し、まだ少しではありますが独自のものを提案できる状態になったので、11月の論文投稿に向けて動き出したところです。インターンは4ヶ月ほど継続した状態になり、業務の進め方も分かってきました。ただし、同時に現在通っている企業が提供するサービスが、自分のやりたいこととは異なるとも感じており、別の企業も覗いてみようとしています。大手企業のサマーインターンには数社ほどエントリーしたのですが、どこにも通ることができなかったのが、気を引き締め直して就職活動に臨んでいます。(8月の近況報告より)

今学期はかなり自由に授業を取ることができました。特にお気に入りの授業が日本政治という授業です。

戦後の日本の政党政治について学説を学習するという内容なのですが、政治に疎かった自分にとって、次から次に全く知らなかった衝撃的な歴史や分析結果が提示されるので、非常におもしろかったです。また考古学の授業も少人数での博物館の見学などが行われました。生き字引の異名を持つ教授に、所蔵品の逸話を解説していただくのは非常に勉強になりました。授業の中で、理系の自分が高校で学習しなかった日本史、世界史の重要性も感じたため、S2タームはスタディサプリなどを使ってガッツリ歴史の勉強をして、通学する機会があれば大学図書館で興味がある文献に目を通してみたいと思います。

(6月の近況報告より)

● 関東地区在住 4年

東京は気温が30度を超える日が続いております。今日は特に日差しが強く、学生寮の最上階の私室の気温は33度を超えまして、クーラーをオンにして授業を受けております。文明の利器に感謝すると同時に、ぼんやりと大学1年生の同時期にクーラーの効いていない教室で受けた難解な数学の授業を思い出して、懐かしく感じております。先日、大学のS1タームのテストが終わりまして、今はレポートの作成に勤しんでおります。レポート課題だけでもかなりの分量になっているので大変です。ひとつにはコロナの影響で対面での試験がレポートに振り返られた影響があります。

もう一つは興味の赴くままに授業を取りすぎってしまったためです。必修授業を取り終えたため、

● 関東地区在住 3年

先週・先々週と、テストに発表、レポート2つが重なってしまい、忙しい日々を過ごすことになりましたが、なんとか切り抜けることができました。レポートを仕上げた後に飲むビールは旨いなとつくづく思います。先日テレビでお寿司の話をしているのを見て僕も食べたくなり、スーパーでお寿司を買って食べたのですが、あまり美味しくありませんでした。安物だったのもあるでしょうが、それ以上に、東京だからというのが一番の原因ではないかと考えています。やはり九州男児たるもの、福岡で新鮮な寿司を食わねばならないと深く胸に刻みました。

昨日渋谷を歩いていたら、僕の後ろを歩く男性が若い女性をナンパしていました。別に渋谷でナンパを見かけるのは珍しいことではありま

せんが、その男性は、ナンパしたことの無い僕からしても、流石に酷いなと分かるくらい話が下手だったので、面白がって聞き耳を立てていると、とうとう「今からユニクロに裾上げに行くんだけど、一緒にどう？」と言い出したので笑ってしまいました。あの不器用な話し方ではどこに誘ったってダメだろうとは思いましたが、でもなぜカフェとかじゃなくて、よりによってユニクロの裾上げだったのか非常に不思議です。

(7月の近況報告より)

例年僕は土用の丑の日のことなどまったく気が付かないかのように過ごし、世間が土用の丑の日のことを忘れ去った頃になって漸く「あ、そういえば今年も鰻を食べ損ねたな。まあまた来年」という具合に自分を納得させて、鰻代を払う勇気のない自分を騙し続けてきました。でも今年は、友人がどうしても鰻を食べたいと言い出したので、テスト明けに上野公園の側のお店で鰻を食べてきました。とても美味しかったです。6600円もしましたが、その価値はあったと思います

しかし6600円もする鰻を食べようと思ったのは、なにも友達に誘われた流れでそうなった、というわけではありません。誘われる前から、何か高い食事をしたいな、という思いがあったのです。そういう思いが芽生えた背景には、兄の結婚がありました。今年の7月に、兄は福岡の女性と結婚したのです。しかし、それがめでたいから高い食事をしたいというわけでもありません。高い食事がしたかったのは、僕だけが両家顔合わせの食事会に参加できなかったからでした。試験の都合上、どうしても7月に帰省するわけにはいかなかったのです。そのため僕は食事会の華やかな料理を写真で眺めることしかできませんでした。その写真を眺めている内に、心にぽっかりと大きな穴が空いたのです。それは高い食事をしなければ埋められない種類の穴でした。ですから僕は友人からの鰻の誘いに快くOKし、ふわふわの鰻を綺麗に平らげました。お腹を満たすためではなく、心を満たすために。そしてそれは成功に終わりました。大きな穴は塞がって、今ではツルツルすべすべの心で兄の結婚を祝福しています。

(8月の近況報告より)

● 関西地区在住 3年

5月中旬以降、本格的に就職活動を始めています。サマーインターンの応募業界としては総合系コンサルを中心に銀行、商社、メーカーなど幅広く見えています。外資コンサルやベンチャーは比較的選考のタイミングが早く、加えて日系大手も見ていることから長期にわたって選考活動をしなければならず、少し体力切れを心配しているところです。

また、エントリーシートの執筆作業の中で、自分が将来やりたいことについて考えさせられる場面が数多くありました。

私はどちらかというと家庭面での夢・やりたいことが多く、仕事に関するやりたいことが十分に定まっていないと実感しました。他者の影響を強く受けやすく、人助けにモチベーションを発揮できること、日々のニュースで問題意識を抱えていることから、漠然と社会課題の解決に携わりたいと考えているのですが、どうも動機が薄く表面的な気がしてなりません。やはり将来の夢には動機が重要なのか、それとも動機は二の次で、実現のための過程を分析したうえで必要な道を進めば評価されるのか、迷っているところです。(私がこんなことを迷うのも、エントリーシートを埋める必要があるから迷っているのかと考えると少し嫌気がさしますが。)

(6月の近況報告より)

● 関東地区在住 2年

相変わらず実験のレポート課題は毎週平均15時間かかっています。春学期中が終わるまでこの課題から解放されることはなさそうです。しかし、あまりに時間が掛かり、取れる単位は2単位と他の授業と変わらず、名目上レポートの書き方を覚えるための課題らしいのですが、今の量の半分の量でも十分と思えるのと、量が多すぎて質の向上に時間を充てられておらず、他の勉強や自分磨きなど、もっと毎週15時間を充てるべきものはあると考え、実験を担当する先生に交渉を行いました。すると、僕を含め他の友達も平均15時間かかっているということに先生は驚かれ、来年度から量を減らすことを検討してくれるようでした。確かに、先生側も多いんじゃないかと思っていたらしいです。

しかし、寮の先輩に聞く限り最低でも数年前から慶應はこのような量の課題を出し続けてい

たはずですが、今まで誰も声を上げなかったことがとても不思議でした。恐らく、周りの友達の考えから類推するに「理系はこんなもんだ」とあきらめていたのだと思います。あきらめず、声を上げることはとても大事だと思いました。参考までに他の大学の友達に聞いてみましたが、ほとんどがそのような実験レポート課題はなく、唯一あった阪大が、最大でも8時間というぐらいでした。交渉はまだ完全には終わっていないので、明日もう少し具体的にどうしていくかまで、先生と話して決めようと思っています。

実験以外では、電子工作をする僕にとっては電気情報工学科の授業の内容は簡単であるのと、授業が少しわかりづらいため、周りの友達の要請を受けてほぼ毎週、学科LINEグループで授業についての相談会を開いています。それ関連や、(当初は学科LINEに招待する目的で)対面実験で同じ班になった人に積極的に話しかけたおかげで、僕は学科にたくさんの友達ができました。対面実験で同じ班になった人はほぼ毎日のように集まって、一緒に実験レポートを書いています。

さらに、もともと入っていた社会問題を話し合うサークルも本格的に活動を始め、僕は今年他にもいくつかサークルに入り、また、もう少ししたら(AIの作り方を学ぶ目的で)コンピューターサークルにも入ろうと思っているので、実験レポートで大変とはいえ、各方面に知り合いができて割と充実して過ごしているなと思っています。この出会いを大切にしておきたいなと思っています。

ちなみに、最近時間管理を行うことによって筋トレやジョギングは再開いたしました。また、もともとのブログはまだ停止したままですが、「中学生でもできる電子工作教室」という新しいブログを開設し、隙間時間に少しずつ更新しています。

(6月の近況報告より)

● 関東地区在住 2年

最近の報道などを見て、学問が社会の役に立つのか、国が研究に金をかける理由は何か、などを考える機会が少しありました。「コロナウイルスが流行している中で関数解析(数学の分野の1つ)を勉強する必要はあるのか」と、冗談交じりに話されている方もいました。黒田奨学会に応募する際にも自分はそのことについて

考えていましたが、その時も今も納得する答えを得ることができていません。ただ最近、「価値観」がキーワードになるのではないかと考えるようになりました。学問が社会の役に立つのか、という問いに対して、現在の価値観で役に立つかどうか分からない、あまり役に立たないように見えることもあります。

例えば1900年代の価値観でウイルスに対する認識すら浅いところに、DNAやPCRの研究が社会の役に立つのか、と言われたらおそらく社会の役に立たないと考えられると思います。しかし、2021年の今振り返るとウイルスに対するワクチンなどに用いて、目に見える形で人命に関わっていて、社会の役に立つと言えると思っています。そのように研究が役に立つのは、研究がウイルスなどに対する知識を深めて、その知識が生まれることによって認識が変化したからではないかと考えました。

研究の1つの大きな社会への貢献として社会の認識を変える、すなわち価値観を変えることがあるのではないかと考えるようになりました。しかし、それでは学問や研究で何の成果も生まれないものは社会の役に立たないのか、という問いに対しては良い答えを持っていません。また日本が学問や研究に研究費を割く必要はあるのか、余裕がある国に任せた方が良いのではないかと、という問いに対しても良い考えを持ち合わせていません。

少し長くなりましたが、社会が学問や研究にリソースを割かなければならない理由、割いた方が良い理由は何かということをお最近少し考えています。現時点では納得いく考えに近づいてるかすら不明ですが、自分がどういう職に就くにせよ、この問いは長く付き合わなければいけないものと思っているので、考えを深めていきたいです。

(6月の近況報告より)

● 関東地区在住 2年

憲法の講座をある程度受講し終わり、判例を見る中で最高裁の立ち位置など考えさせられることが多かったです。また、大学の教育学を扱う複数の授業で、潜在的カリキュラム(ヒドウン・カリキュラム)に関し何度も学び、自分もその影響を受けていることを実感するとともに、自分の中に存在していたバイアスに気づかされる

ことが多く、自分の甘さを実感させられました。潜在的カリキュラムがもたらす心理的影響については、研究しかいのあるテーマだと感じたため、まだ専門にすることは決めておりませんが、これから学んでいきたいと思います。進学振り分けに関しては、教育学部の教育心理学科志望で今の所一位であるという情報が得られましたが、まだ2Sが終わっておらず、0点換算で点数が下がっているように見えるだけの人もいると思うので、油断せず、2Sの成績もキープし、無事志望先に入れるように努力いたします。そのため、7月からはテスト対策・レポートのための文献読みなどに明け暮れています。

(7月の近況報告より)

● 九州地区在住 3年

最近は本当に変わらない日々を送っています。出かけることもなかなかできないので、iPadで本を読み始めました。電子書籍だとスペースも取らないし、沢山の本を持ち運べるのでとても便利だということに気が付きました。教育について知りたいと思い、教育系の本を主に読んでいます。それらの本で印象に残っている言葉が、「すべての子供に平等に教育(の機会)を与えないなら、すべての子供に不平等に教育を行え」というものです。非常に考えさせられる言葉で、教師になる上で向き合い続けたいといけな

いとだと感じました。それに伴い、自分の専門分野の研究についても、歴史と教育を絡めた方向性で決めようと思いました。

1週間ほど前に2回目のワクチンを打ちました。とりあえず少し安心しましたが、今後も気をつけて過ごしたいと思います。

(9月の近況報告より)

● 九州地区在住 3年

あと半月ほどで3年生の前期の授業も終わり、期末試験となります。中間試験は2週間ほど前に一科目だけあり、それも、今とっている数学の科目で一番難しい授業でした。その場でもあまり解けた気がせず、先生の講評も、「全体として勉強不足。」と怒っていらっしゃいました。勉強不足の自覚があればまだ良かったのですが、自分なりにしっかり準備をして挑んだ結果だったので、かなり落ち込みました。本当に落ち込みました。「全体として」なので、先生が私個人の結果にどう感じているかは分かりません。今は完全に気持ちを切り替えて、期末に向けて勉強しているところです。この授業にひきづられて他の授業の勉強が疎かになることは避けたいため、満遍なく勉強したいと考えています。

来月の近況報告は、後期から始まるゼミの選択について明るく語れるように、頑張ります。

(7月の近況報告より)

初の企画 — 奨学生のエッセイ —

こちらが初の試みとして、小説家を目指している現役奨学生がエッセイを投稿してくれましたので紹介します。

祖母のライフヒストリー

京都大学理学部2年 権藤 洸人

以前からスマートフォンの扱いの難しさにしばしば愚痴をもらしていた祖母は、こちらからライン電話をかけると私のスマートフォン画面が埋まるほどに大きくその顔を見せた。すこし聞きたいことがあるのだと声を掛けると、彼女は若干戸惑いながらも協力的に同意してくれた。以下に記述するのは、私の母方の祖母である「平山マス子」さんのライフヒストリーである。特に、彼女とその親族との関係に焦点を当てている。

祖母は、当時日本の統治下におかれていた朝鮮半島の南西に位置する「木浦^{もつぽ}」という街で生まれた。五人兄弟の長女で、両親に加えて妹と弟がそれぞれ二人ずつという家族構成である。まもなく戦争が終結し、彼女が小学二年生の折に日本へ引き上げた。この際、海上移動には正規の船ではなく、

「闇船」を利用したという。闇船とは、引き上げに時間のかかりすぎる正規船の代理として非正規に運航されていた民間船のことだ。

引き上げた先は、福岡県の飯塚という土地だった。祖母の父が近くの炭鉱で働くことになったのがその場所に至った理由である。まもなく祖母は中学に進学した。中学では同級生からのイジメ被害にあっていたようだが、祖母当人は当時そのことにまるで気づいていなかったらしく、後年の同窓会でその事実を知らされたのだという。彼女いわく、背が小さかったことが理由ではないかということだ。

祖母は、本当は高校に進学したかった、と小さく口にした。しかし当時は、男である第二人が優先されなければならない。金銭的な問題から彼女は進学を許されなかった。中学を卒業してからは、彼女は簿記仕事を行う派遣会社に就職した。初めの派遣先は豆腐製造会社である。ここには大体一年ほど勤めたが、そこでやめた。やっていられなくなった理由は、税務署からやってくる役人とのやり取りにあった。会社の命令を受けて帳簿をごまかしていたので、役人に疑いの目を向けられ続けながら不正を隠し通すことに耐えられなかったのだという。

次に派遣されたのはパチンコ屋だった。このとき、パチンコ機械を扱っていた業者の伝手で、住処を飯塚から福岡の方へ移っている。しばらく勤めていたが、店内の騒音が災いして聴力が悪化したことを理由に、派遣会社をやめて働き口をレストランに移した。

このレストランでの仕事が、彼女の人生にとって一つ転機となった。夫になる人物との出会いである。名前を平山倉彦（ひらやまくらひこ）といった。ウェイトレスをしていた祖母に、倉彦さんが一目惚れしたのだという。そうして声を掛けられてからは、まるで滝が流れ落ちるように物事が進んでいった。倉彦さんの父親、つまり私の曾祖父にあたる人物というのが非常に強引な性格をしていて、祖母の気持ちはあまり考慮されることなく結婚までの段取りが決まっていたのだそうだ。

この曾祖父という人物について祖母は詳しく述べてくれた。先ほど強引な性格といったが、それ以上に責任感が強く、スケールの大きな人であったという。職業は「保護司」という仕事に就いていて、これは犯罪や非行をしてしまった人々の更生を目指して取り組むものである。そのほか、自治体の長としての活動もずっと行っていたようで、何か人と人との間に問題が起きた際には、必ず仲裁に入ろうとするほど人情に厚い人柄であった。

曾祖父のことについてはこうして教えてくれたのだが、彼女の夫である倉彦さんのことについては、尋ねてもほとんど教えてくれなかった。——しかし、その理由に関連していると思われる内容が、話を聞くにつれて明らかになっていった。

その前に、結婚後の祖母の暮らしがどのようなであったかを示しておく。結婚してからは夫の家のある福岡県福岡市博多区の南端の町に移り住んだという。具体的な町の名前は覚えていないそうだ。上述したように、幅の広い活動をしていた曾祖父は、その交友関係が広く、また倉彦さんについても友人が相当数いたということもあって、祖母の家には毎日のように人が入れ代わり立ち代わり訪れていた。来客への接待というのが非常に大変な仕事だった、と祖母は述べている。昔は今よりも気性の荒い人が比較的多かった一方で、祖母自身は気の強い人間ではなかった。そのため、何かいちゃもんをつけられた際に、自分のなかにストレスをため込むばかりになってしまっていたのだそうだ。家の中には、曾祖父の奥さんである曾祖母（祖母にとっての姑）もいたのだが、彼女は自らあくせく働くようなタイプではなく、基本的に家事全般は祖母の仕事だった。夫である倉彦さんについても、これがまた大変な酒飲みで、夜遅くに帰ってきたかと思えば、大声で叫び散らし近所に迷惑をかけたうえで、また祖母の注意が気に入らないと暴言を吐いたという。あまり良い時期ではなかった、と祖母はまとめている。

よい時期ではなかった、と言っているが、ここからの祖母の人生はさらに壮絶である。

祖母はその後、私の叔父にあたる長男をまず出産した。名前を正一（まさかず）とつけた。続いて、今度は私の母にあたる長女を産むことになるのだが、ここで問題が起きた。

祖母は妊娠中にサリドマイドを服用していた。サリドマイドとは、旧西ドイツの製薬会社が開発した睡眠薬である。暮らしの中でのストレスに加えて、妊娠の重圧もあったことで夜に寝られないのはむしろ当たり前になっていたがゆえに、睡眠薬を飲んでた。

しかし、サリドマイドにはよく知られた副作用がある。この薬を妊娠初期に服用すると、胎児の手足に奇形を起こしてしまうのだ。実際、私の母には、両手の小指を除いて両手両足の爪がなく、指の先端は硬化した皮膚で覆われている。また、これも副作用のひとつであるが、左目も生まれつき見えない。

祖母は本気で、母をつれて二人で入水自殺をしようとした。母の人生が暗いものになってしまうのではないかという不安・罪悪感に加えて、周囲の人々からの嫌味もあった。どうしてそんな子どもを産んでしまったのか、という類いの言葉は、祖母をきつく締め付けた。

しかし、寸前で思いとどまる。赤ん坊の顔を見ていたら、どうしてもできなかったという。

結果的には、母は気の強い性格に育った。確かに学生時代にはイジメに遭うこともあったが、むしろ反撃にでることもあったという。ただ、その母が私や、私の姉を産むときには、奇形が遺伝したりしないかと不安が付きまとったということを最後に述べている。

続いて、祖母が57歳の年。これも不幸な年だった。三月に、先ほど話に上った曾祖父が他界。次いで十一月に、夫の倉彦さんが亡くなった。飲酒運転に起因する事故だった。車が高速道路から飛び出して、地面へとダイビングしてしまったのだという。祖母は、今なら笑い話にできる、と言っていたが、それと同時に、私や私の姉が生まれたときにはすでに倉彦さんが他界していたことを挙げて、お爺ちゃんに孫の顔を見せたかった、とも言った。倉彦さんのことをあまり述べられないのは、ここに理由があるのだ、と祖母は思い出したように付け加えた。

こういうことがあってからは、倉彦さんの弟が営んでいた塗装屋に面倒を見てもらいながら過ごした。この時期になってからは、周囲の人々、とくに親族に恵まれた、と祖母は振り返った。

私は最後に、祖母に対して「まとめると、どういう人生だったか」と聞いた。祖母は一言、「普通の人生だった」と答えた。「でも、」と続け、「今は、孫の活躍を見るのが楽しいし嬉しい。健やかに育ってくれてよかった」と言ってくれた。



黒田奨学会の奨学金支給制度拡充について

黒田奨学会は令和4年度から奨学金支給制度を下記のように大幅に拡充します。

経済的な負担をできるだけ少なくし、学業や研究に全精力を費やして欲しいという思いからの支給制度拡充です。

奨学生皆さんは当会の新しい奨学金支給制度を十二分に活用し、社会に貢献できる人材となるべく、修学に励まれることを期待します。

新制度内容

1) 募集枠

- ① 従来の通常募集として、学部生を15名程度（内2名は学部編入）とするが、最終的には人物と成績次第で実採用数は変動し、かつ予定数に満たない場合もある。
- ② 新たに特定枠募集を設け、九州大学および九州工業大学の大学院修士生を対象にそれぞれ3名、1名の奨学生を募集する。

2) 奨学金基本支給

（支給に関しては最低限成績としてGPA2.5以上を継続することが条件）

基本額として学部生には6万円、修士生および医学部5-6年生には8万円、博士生には12万円を支給。

3) 自宅外学生に対する地域加算支給

九州地区2万円、関西地区（京都・大阪・神戸）3万円、関東地区（東京）5万円を毎月加算。

（ ）以外の都市の場合は別途決定。

4) 成績加算支給

学部生2年次以降で累積GPA3.8以上の者には月額2万円を加算。

（但し、専攻や研究目的の総合的審査によりGPA3.8以下の場合でも支給可能性あり）

5) 入学準備金支給

特に経済的支援を希望する者には従来通り50万円以内の入学準備金を支給する。但し、学生支援機構より、入学金25万円、年間授業料55万円および生活費80万円の計160万円の範囲で支給を受ける者にはその金額を考慮して入学準備金を支給しないことがある。具体的基準は現時点のものであり、今後変わる可能性あり。

6) 研究テーマによる加算支給

GPAが累積3.0以上で特定の研究テーマを有し、申請があった者については、その学術的、社会経済的意義を考慮した審査に基づき、年間予算額600万円の範囲で支給。通常募集枠400万円、特定募集枠200万円を目安とする。

7) 海外留学等加算支給

累積GPAが3.0以上で海外留学申請があった者については、審査に基づいて支給

- ① 短期海外研修および国際学会発表等については20万円以内の額を支給
- ② 交換留学は月額基本支給額に加え、年間60万円以内の額を加算支給
- ③ 6ヵ月以内の短期留学は、月額基本支給額に加え、30万円以内の額を支給
（但し、語学研修のみの場合は該当せず）

④ 海外留学のための特別支給

学部卒業後の海外長期留学の場合、厳密なる審査の上、概ね500万円以内を支給。（但し、国内の大学では研究できない分野の研究を目的とした留学で、成績や研究目的に加え、他の奨学金または受け入れ大学での奨学金及び自己負担額などを総合的に勘案して支給額を決定）

8) 応募時期

6) および 7) については令和4年1月以降に随時受け付けて審査の上決定するが、支給は令和4年4月1日以降とする。

令和3年9月1日

公益財団法人・黒田奨学会理事長 伊達 健太郎

— コロナワクチン接種に想う —

馬頭 徹夫
(元・副理事長)

昭和23年夏、旧制中学3年生であった私は仙腸関節カリエスを発病し、国立筑紫病院（現・国立がんセンター）に入院した。この病院は旧日本陸軍の野戦病院として使われていたもので、臃げな記憶によれば、広大な敷地に木造バラックの棟が凡そ10棟ほどあり、各棟は吹き抜きの渡り廊下で結ばれていた。病室は木造ベッドが6-8床、ぎっしりと入っていた。もちろん、仕切りカーテンはないからプライバシーはない。当時は結核が大流行で、当院では開放性の患者は隔離病棟、その他は一般病棟である。カリエスのような結核絡みの病気だと退院まで2-3年の長期入院は普通であった。私の周りは復員軍人、公務員、職人、政党役員、ヤクザ等、戦中戦後を様々に生きてきた人たちが、ここでは丸裸で、実におおらかな独特の世界を作っていた。完治したのは3年後で、学制改革による新制中学3年生に復学した。

結核は亡国病といわれ、小1と中1の入学時に全員、ツベルクリン反応検査を受け、陰性ならばBCGワクチン接種、陽性ならばX線胸写で発病の有無を調べたのである。BCGは副反応が強かったこと、発病率が下がった等の理由で接種が中止され、ツベルクリン反応検査も徐々になくなり、平成24年には完全終了となり、結核が忘れられようとしている。しかし、今なお、我が国は世界の「結核中級蔓延国」であり、専門病院や施設が各地に設けられている。9月24日から30日の1週間は、「結核予防週間」と定められている。我々は結核と共存しているのである。

ところで、世界を震撼させているコロナウィルスによる感染症だが、結核同様にこのウィルスはしぶとく生き続けるだろうと思われる。近々、特効薬が完成するだろうが、一時的に治まって収束とはなっても終息とはならないと私は思っている。

そこで、国家事業として国立の本格的な感染症病院を設け、姿・形を変えて現れるであろう新ウィルス等に対処してもらいたい。この分野で日本から世界をリードするリーダーが育ってくれることを期待する。

ところで、日本初の種痘に成功したのは秋月藩であることは既に知られている。次は福岡藩から先ず日本初が生まれ、次いで世界初が誕生することを期待してやまない。

行 事 報 告

● 令和3年度 第1回九州地区研修会 令和3年6月5日

令和3年度の第1回九州地区研修会を6月5日、土曜日にオンラインにて行いました。発表会に先立って、午前9時半より午前中8名、午後6名の奨学生を対象に面談を行いましたが、一人20分の時間枠だったため、近況報告だけでなく、進路相談など、かなり余裕をもって面談に応じることができたように思います。

午後3時過ぎからは発表に移りましたが、大学院生からスタートして学部3年生まで6名の発表が行われ、内容的には宇宙、新型コロナ、地震、マネキン、海外の選挙制度など、幅広いテーマでの話となり、司会役の私も十分楽しませてもらいました。

質問もかなり多かったようで、対面式の発表会に比べるとオンラインでは奨学生からの質問が多い様に感じます。発表会最後は恒例により小田部理事による講評ですが、発表者全員が3年生以上ということもあり、酷評(?)は皆無、発表者はほっとしたのではないのでしょうか。17時半には無事に終了しました。

参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、小田部理事（教育指導担当）、野中理事（関西担当理事）および八並理事（教育指導担当）
奨学生参加者（発表者以外）：小幡、中田、松崎、矢ヶ部、朽網（関西）、横山、蒲池（関東）、九州地区1年生全員

（岡本）

研修会に参加しての感想

九州大学工学部電気情報工学科3年 横山 健

令和3年6月5日に九州地区第1回研修会・発表会がオンラインで行われました。

私にとって今回が初めての研修会で、普段の学習で自分から学ぶことがないような分野の話は特に新鮮に感じ、参加していてかなり楽しかったです。

今回は理系分野の発表が4名、文系分野の発表が2名という構成で、理系分野では、専門的な分野の発表から身近な話でもある新型コロナウイルス感染症に関する発表などさまざまでした。

専門的な内容を短い時間で発表するために、身近な例を出して説明されていたり、実際に用いた数式などは、感覚的な説明を加えたりしながら発表されていたため、短い時間でも学べることは多く、私の発表にもぜひ活かしていきたいと思いました。さらに今回は新型コロナウイルス感染症について2名の方が発表されて、小山田さんは感染者の数について分析、前田さんは感染の症状や治療法、ワクチンに関する発表でした。同じテーマでも、学部によって観点の違いを感じることができるのも、さまざまな学部の方が集まって行う発表会ならではのかなと思います。

文系分野では、私にとって触れてこなかった内容で、かなり勉強になりました。

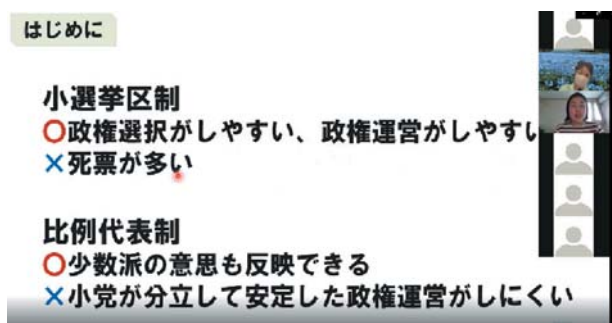
特に、小倉さんのマネキンの歴史についての発表を聞いてからは、今まで意識してこなかったマネキンを意識するようになり、少し自分の中の世界が広がったような気がします。

また、最後の小田部先生による総評では、多くの方が褒められていて、昨年のオンライン研修会の経験が活かされているように感じました。

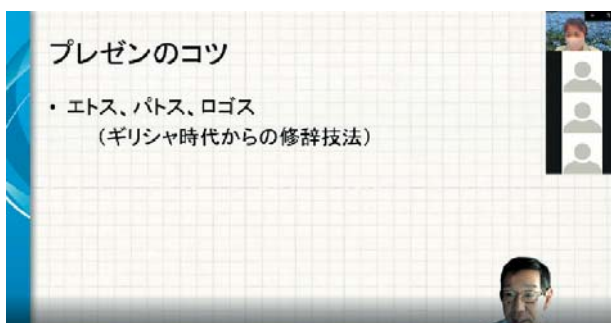
また、特に印象に残ったお話は、発表における説得力というのは、信頼(エトス)、情熱(パトス)、論理(ロゴス)で構成されているというものです。確かに表情や仕草が見えないオンライン発表会は、信頼や情熱というのは伝わりづらい部分だと思います。そこで小田部先生は、資料を画面共有しながら、自分のカメラを画面の中に入れることで、発表者の表情と資料を同時に見せる方法を用いており、ぜひ自分の発表にも取り入れて行きたいと思った部分でした。

最後に個人的な話にはなりますが、私は3年次編入ということもあり、大学の授業でも既に学んだことのある科目が多く、特に最近は授業を聞く新鮮さをあまり感じられていませんでしたが、今回の研修会を通して、新しいことを知る楽しさや新鮮さを思い出し、かなり良い刺激になりました。

次回の研修会では、発表の内容だけでなく方法や資料の見せ方などにも注目して学べるところは全て取り入れて行きたいと思います。



首藤学生発表スライドより



小田部理事による講評

● 令和3年度 第2回九州地区研修会 令和3年7月17日

令和3年度の第2回九州地区研修会を7月17日、土曜日にオンラインにて行いました。前回と同様に発表会に先立って、午前9時半より、午前中8名、午後6名の奨学生を対象に一人20分の時間枠で面談を行いました。面談内容は授業状況、ワクチン接種の有無、夏休みの予定などに加え、先日のアンケート回答内容、特に生活費やバイト状況などにもついて話題を広げて面談を行いました。

午後3時過ぎからは発表に移りましたが、大学院生からスタートして学部3年生まで6名の発表が行われ、内容的には機械工学関係、心身症や野球肘といった医学関係、命の価値計算といった哲学的なもの、さらには鎌倉時代の仏師の制作活動など、今回も幅広いテーマでの話となり、黒田奨学会ならではの研修会となったようです。また、小田部理事の講評が浸透していることが伺え、タイトルの付け方などにも聴取者を引き付けるような工夫もされていたようにも感じます。

奨学生からの質問も今回も多くあり、特に1年生が臆することなく質問してくれたことは発表会自体に活気がでくるようです。中には役員からの厳しい突っ込みにたじろぐ学生もいましたが、回を重ねるごとに成長してくれるでしょう。発表会最後は恒例により小田部理事による講評で締めとなり、時間的には多少オーバーしましたが17時45分に無事に終了しました。

参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、小田部理事（教育指導担当）、野中理事（関西担当理事）および八並理事（教育指導担当）、川瀬監事

奨学生参加者（発表者以外）：山田（関西）、朽網（関東）、九州地区1年生（含3年編入生1名）全員（岡本）

研修会に参加しての感想

九州大学文学部人文学科3年
高瀬 佳奈

令和3年度九州地区第2回研修会は、zoomを使用したりリモート形式で行われました。大学の授業などでは、リモート会議で自ら手を挙げて発言することはためらわれがちで議論が停滞する印象がありましたが、今回の研修会では活発に質疑応答がなされ、発表内容について深い理解が得られる非常に有意義な会であったと感じます。

肝心の発表内容は医療関係が2つ、工学関係が2つ、経済学が1つ、人文学が1つという構成でした。文系の私からすると縁遠い分野の発表ばかりでしたが、それぞれに専門外の人にも分かりやすい工夫がなされていて、どの発表も興味深く拝聴することができました。具体的には、医療でも例えば「野球肘」という耳なじみのある題材を取り上げたり、基礎的な内容から丁寧に段階を踏んで説明したり、アニメーションや動画、手書きのイラスト・表を使用して視覚的に理解しやすくしたり、というものです。黒田奨学会の研修会の目的には、研究・学習内容の報告やプレゼンテーション技術の向上に加えて、もう一つ重要なものとして、専門外の人に専門分野について興味を持たせ、内容を理解させる術を習得することが挙げられると

考えています。

専門的知識を共有しない人を対象に行うプレゼンテーションのスキルは、社会においてアイデアを具現化するための承認・予算を獲得するために必要不可欠であると考えからです。また、大学で行うプレゼンテーションのほとんどは授業や研究室で行われるもので、全く専門を異にする人が聞き手となる奨学会の研修会は、「外部」の人にプレゼンテーションをする貴重な機会と言えるでしょう。今回の研修会では、先述したような様々な発表の工夫に触れることができたのに加えて、先生から「普遍的に興味を引くような話題を導入にして、発表の冒頭で拒否反応を起こさせないようにすべきだ」というアドバイスもあり、発表内容だけでなくプレゼンテーション技法の面での収穫も多い研修会でした。

最後に、今回私の発表時に起こったアクシデントを紹介しておきたいと思います。私が発表していると、スライドを数枚進めたところで突然PCの画面がブラックアウトし、操作不能になってしまいました。強制的に電源を切って再起動することで正常に作動するようになったのですが、原因はOSのアップデートが始まってしまったことでした。皆さん、OSのアップデートのタイミングはしっかり確認しておきましょう！

研修会に参加しての感想

九州大学工学部電気情報工学科1年
工藤 雅人

黒田奨学生として二回目となる今回の研修会及び発表会でも、様々な分野を勉強しておられる先輩方の発表を聞き、その中から色々なことを知り、発見することが出来ました。そんな得られたものの中から、今後自分自身が発表をする立場に立つことを踏まえて参考にしたい、ここがすごい！と思ったところを書いていこうと思います。

まずは末田さんの「自励振動」についての発表。特にすごいと感じたのは、専門的な用語のような難解な内容を理解しやすくするために、文字だけではなくカラフルな図や更には動画までも使って説明されていたところです。文章だけでは伝わりづらい内容を図・動画などの視覚的情報から理解を促すという手法は参考にしてみたいと思いました。

次に龍さんの「心身症と自律訓練法」についての発表。心身症というものの定義から始まり、メカニズム、実際の症例と続いていき、まとめを挟んだのちに聞き手を巻き込んでの自律訓練法の実践、という発表の流れが、とても斬新かつ効果的に活用されていてすごいなと思いました。最後の実践のような、聞き手をも巻き込んで発表を飽きさせないようにするという工夫がとても勉強になりました。

続いて小石さんの「命の価値計算」についての発表。手描きの図を用いて段階的に説明していき、最終的に本題まで話を展開していく流れのおかげでとても分かりやすく感じました。また、講評で小田部先生もおっしゃっていたように、小石さんが楽しそうに発表をされていて、聞いている私も楽しく面白く発表を聞くことが出来たと感じ、改めて発表者の態度の大切さを理解しました。私

は人前に立つことがあまり得意ではないのですが、小石さんのように堂々と楽しげに発表できるよう、しっかりと準備や練習をしていきたいと思います。

続いて田之上さんの「肘に住むネズミ」についての発表。まず驚かされたのはそのタイトルです。タイトルで聞き手にインパクトを与えることで最後まで発表を聞いてもらうという工夫に、なるほどな！と感じさせられました。そして、発表の中では手描きの丁寧な図が使われており、またとてもレイアウトがきれいで、スライドの細やかな工夫や気配りが全体の発表に好影響を与えるのだと分かりました。

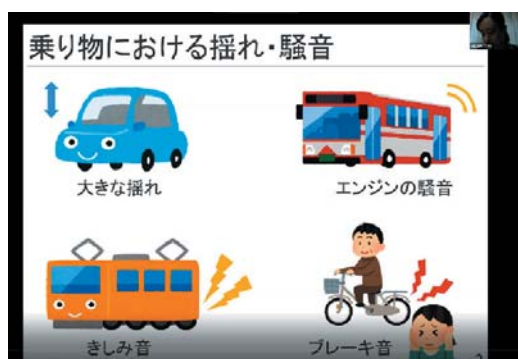
次に山田さんの「ウィーンブリッジ型発振器」についての発表。私が特にすごいなと思ったのは、スライドの多様性です。発振器の概要や仕組みの解説、実際に使用した回路図などでスライドのスタイルも分類されており、今何の話をしているのか一目で分かるというのがとても面白いなと思いました。

最後に高瀬さんの「仏師快慶」についての発表。全体を通してスライドの背景色が黒色で、それによって白文字が強調されて見えたり、写真が見やすかったりと、背景色にも発表をよりよくする工夫があるのがすごい！と思いました。またアニメーションも数多く盛り込まれており、聞き手を引き付ける工夫が随所に込められた、とても参考になる発表だなと感じました。

このように、先輩方の発表には様々な工夫が凝らされているということが分かりました。今後の発表をより良いものにするために、これらの工夫を参考に、かつしっかりと準備と練習を重ねて本番の発表に備えたいと思います。改めて、今回発表をしてくださった先輩方、本当にお疲れさまでした！



参加者ギャラリービュー



末田学生発表スライドより

● 令和3年度 関西地区研修会 令和3年9月4日

令和3年度関西地区研修会として9月4日、土曜日に発表会のみを行いました。コロナ感染が収まらない中、大阪現地での開催を断念し、2年続きでオンラインにての開催となってしまいました。面談に関しては昨年同様、8-9月の夏休み中に各奨学生の希望に従ってスケジュールを組んだ上で、約20分間の個人面談を行いましたので、この発表会当日にはほとんどの関西地区奨学生が面談を終えた段階でした。

九州地区や関東地区の発表会ではまず大学院生から発表が始まりますが、関西地区では大学院生はゼロ、ということで医学部6年の矢野君がトップバッターとして先陣を切ってくれました。そして令和3年度としては最初の発表となる1年生による二題の発表まで計10人が発表しました。1年生の発表ということで、我々教育指導担当理事も大いに興味を持って聴かせてもらいました。結論としては、予想外に素晴らしい出来であったように思います。スライド作成、発表内容、発表態度、どれをとっても1年生にしては上出来ではないでしょうか。少々苦言を言うとすれば、質問に対する応答が不十分だったかな? 「調べていません」、「知りません」ではなく、次回からは質問をあらかじめ想定して調べておくことも必要かもしれません。もっとも、これは1年生に限らず、2年以上の奨学生にも当てはまることです。

内容的には今回も黒田奨学会の発表会ならではの幅広いテーマでの発表がされており、十分に教養を深めることができた、楽しめる発表会でした。

恒例の小田部理事による講評が最後に行われ、午後5時過ぎに無事終了しました。

参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、小田部理事（教育指導担当）、野中理事（関西担当理事）および八並理事（教育指導担当）
奨学生参加者（発表者以外）：東遼晴（関東地区）

（岡本）

研修会に参加しての感想

神戸大学国際人間科学部環境共生学科2年
高田 早紀

9月4日に行われた関西地区研修会に参加させて頂きました。今年の研修会も去年に引き続きzoom上での発表を行いました。どの方の発表も大変面白く、引き込まれるものばかりだったのですが、今回特に印象に残った発表は、名古屋大医学部6年の矢野先輩の「緩和ケアについて」と大阪大理学部2年の山田さんの「放射線の素描」です。「緩和ケアについて」は、緩和ケアとは何なのかイラストや図を交えながらわかりやすく解説されていて、恥ずかしながら「緩和ケア」という言葉をそのとき初めて聞いた私にもとてもわかりやすい発表でした。また、小田部先生の講評内でも取り上げられましたが、パワーポイント内に添削の跡が多くあり、そのように聞き手にわかりやすく伝えようと入念に準備をする姿勢は今後見習っていきたいと感じました。

「放射線の素描」は、放射線の人体への影響や放射能の単位、時事的な放射線問題についてお話し

された後、一般市民と専門家・行政間の放射能に関しての合意形成について自身の考えをお話されていました。一般市民の科学リテラシーの向上については大学の授業で取り上げられることも多く、関心のある事柄でしたが、山田さんの発表を聴き、専門家と非専門家である市民との科学コミュニケーションの重要性を改めて感じました。

他の奨学生の方々の発表を聴いて、専門的な内容であるにも関わらず、それを誰に対してもわかりやすく解説し、自分の発表内容に興味を持ってもらう工夫をされている方が多いことに驚きました。研修会以外でも大学の授業などで発表する機会は年に数回ありますが、いずれも同じ分野を勉強している人たちの前の発表であるため、綿密に発表の構成を練らずとも伝わるだろうと考え、「誰に対しても伝わりやすい工夫」というものをこれまでしてこなかったことを反省するとともに、その難しさを痛感しました。次回の発表の際には、学部も専門も全く異なる方々にどうすればわかりやすく伝わるか、関心を持ってもらうためにはどのような工夫をすれば良かに重点を置いて

発表の準備をしたいと思います。

研修会は、自分の専門分野についてのテーマを設定し、構成を考えることで自身の考えを見つめなおすきっかけになるとともに、普段触れることの少ない専門分野以外のお話を聴くことのできる貴重な機会だと思います。一年を通していても、この研修会のように一度に様々な分野のお話を聴くことができ、知見を得られる機会はほかに無いのではないのでしょうか。そういう意味でも、この研修会に参加できることがいかに恵まれたことであるかを改めて感じました。この研修会で得られたものを今後の自身の勉強に活かし、次回の発表がより良いものとなるよう努力したいと思います。

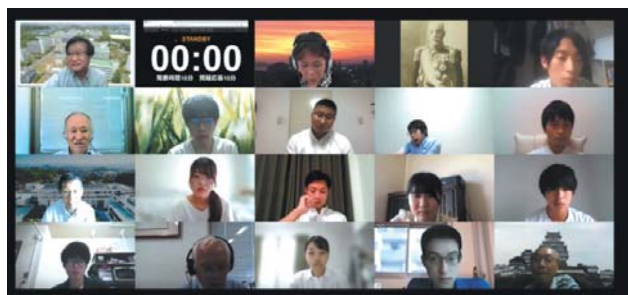
大阪大学理学部物理学科2年

山田 和輝

今年の関西地区研修会も昨年に引き続きZoomでの開催で画面越しでの発表となりましたが非常に充実したものになりました。他奨学生の発表内容は医学、薬学、地学、文学、経済学など文理を問わず多くの分野に富んでおり、どれも興味深かったです。私が前提知識を有している発表もありましたが、ほとんど前提知識を有していない発表で少々不安でした。しかし、皆さんが前提知識を持っていない私たちにも理解できるように専門用語をかみ砕いて話したり、発表スライドを見やすいように工夫したりしてくださるので各々の発表を飽きることなく聞くことができ、非常に刺激を受けました。

黒田奨学会の研修会の大きな魅力は、やはり自分が普段学んでいる分野とは違う人に自らの学びの成果を発表すること、そしてその人たちの発表を聞くことにあります。

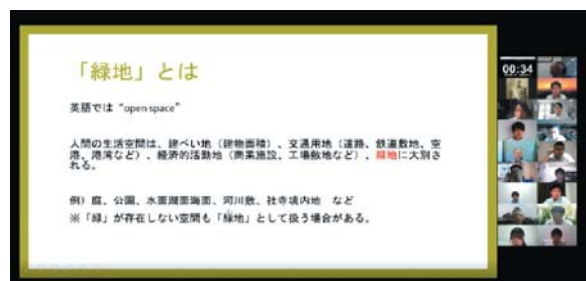
前提知識を普段共有している物理学科の仲間



ではなく、他分野を学ぶ人に10分という短い時間で自分の研究内容を伝えなければなりません。どうすれば聞き手に理解してもらえるのか、どうすれば効果的に発表内容を伝えられるのか、発表の題材探しから発表スライドの作成、そして発表中にもこうしたことを私は常に頭をめぐらせています。想像以上に大変なことであると去年と今年の研修会で実感していますが、これは非常に重要なことです。なぜならば、将来、自分の研修成果を社会に還元していくためには他分野を学ぶ人にもアピールしなければならないからです。前提知識を必要とせずにわかりやすく分野の異なる他者に伝える力は一朝一夕で身につくものではなく、この関西地区研修会で得た学びや経験は将来社会へ出たときに必ず役に立つと確信しております。

また、大学レベルの他分野の発表もめったに聞けるものではありません。どの発表をとっても非常に興味深いものであると同時に、社会を出る者としての教養となり、さらには自分の研究からは得られなかった新たな発想につながるかもしれません。だから、私はオンライン研修のメリットを活かして他地区の研修会にも参加しています。

研修会後の懇親会で発表会の余韻を感じながら他奨学生と対面で会話することを私は楽しみにしておりますが、これまでZoomでしか研修会に参加できておらず、私が黒田奨学会を卒業するまでに実現できるか心配です。しかし、研修会は貴重な学びであることには変わりありません。私が黒田奨学会の研修会で発表するのは1度きりであり、そのどれも貴重な経験になります。来年の関西地区研修会では今年の発表内容、スライド作成の反省点を踏まえてより充実した発表になるようにこれからの勉学により一層励んでいく所存です。



左上:小河学生発表スライドより

左右:高田学生発表スライドより

下:参加者ギャラリービュー

● 令和3年度 第3回九州地区研修会 令和3年10月9日

令和3年度の後期第1回九州地区研修会を10月9日、土曜日にオンラインにて行いました。発表会に先立って午前9時45分から行った面談では、午前中7名（1名欠席）、午後6名の奨学生から近況報告をしてもらいましたが、今回は夏休みをどう過ごしたか、前期成績はどうであったか、などが中心の話題となりました。

午後3時過ぎからの発表会では、九州地区の1年生による発表は今回初めてとなります。博士課程1名、学部3年生1名、1年生3名と計5名による発表を一人20分の時間枠で行いましたが、いわゆる理系が4名、文系の発表が1名と偏ってしまい、今思うとスケジュール調整が十分ではなかった感がしています。

発表内容を観てみますと、博士課程学生の発表はもうベテランの領域に達した発表で、さすが！と思わせるものでした。3年の学生の発表はタイトルが非常に興味ありで、おそらく考え抜いてつけたと思わせるものでした。また、スライド作成もなかなか凝っており、その努力は評価します。ただ、タイトルと内容がかけ離れ、タイトルが独り歩きした感があつたのは非常に残念でした。

新入生の発表は3名とも発表のために時間をかけて努力した跡が伺え、内容的にも自分の専門にこだわらずに日常的な疑問などから発したような発表で、その点では特徴的で印象的な発表だったようです。

今回の発表会には黒田長高様にご参加戴きました。司会者として、参加した奨学生にきちんと紹介しなかったこと、発表への感想もお聞きしなかったことを非常に反省しております。

参加役員：黒田長高様、伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、八並理事（教育指導担当）、および野中理事（関西担当理事）

奨学生参加者：発表者および当日面談を受けた九州地区奨学生

(岡本)

研修会に参加しての感想

九州大学電気情報工学科3年

山田 健太

令和3年10月9日に行われた九州地区研修会・発表会に参加させていただきました。今回の発表会では5名の発表が行われ、どの方もスライドづくりに工夫がされていて、発表を通して伝えたいことが聴講側にひしひしと伝わってくるような素晴らしい発表でした。特に、小幡さんと工藤さんは私と同じ学科であるため、お二人のプレゼンはかなり印象に残りました。

小幡さん自身が研究されている、印刷技術を用いた新規光デバイスについての発表では、多孔質な膜にインクを垂らすことでどのようにして光デバイスが出来上がるのかということについて、感覚的にわかるように図を用いたスライドづくりがされており、また、その光デバイスを用いてどのようなものが作れるのかという具体例も示され、非常に分かりやすいものでした。私も来年から研究活動が始まりますが、小幡さんのように自分の研究内容をかみ砕いてわかりやすく伝えることができる発表を心掛けようと思います。

工藤さんはpythonを使った音声解析・判定プ

ログラムを作製されていましたが、講義の一環としてではなく、自主的にこのプログラムを作製しようと思い立ち、実際に作り上げたことが本当に凄いなと思いました。また、プレゼンの際、作製した音声解析アプリを実演するというのは良いアイデアだと思い、勉強になりました。

今回の発表会で一番強く感じたのは、どの方も質疑応答の準備がしっかりされていたということです。私が前回発表したときは、質問にうまく答えられず、発表内容の補足ができませんでした。今回発表された方々は発表内容に関連するものまでしっかりと知識をつけられていたし、中には質疑応答用の資料を作っている方もいました。質疑応答はプレゼンの中でもかなり重要だと考えているので、自分も見習って次回発表するときには十分な準備をしようと思います。

およそ2年間、オンラインでの発表会に参加させていただいて、オンラインならではの資料の作り方やプレゼン時の工夫を学ぶことができ、またオンライン発表会のメリットも感じ取ることができました。ですが、やはり対面での発表会にも様々なメリットがあると思うので、来年こそは対面で発表会ができることを願っています。



参加者ギャラリービュー



矢ヶ部学生発表スライドより

● 令和3年度 第4回九州地区研修会 令和3年11月13日

令和3年度の後期第2回九州地区研修会を11月13日、土曜日にオンラインにて行いました。発表会に先立って午前9時30分から行った面談では、午前中8名、午後6名の奨学生から近況報告をしてもらいました。1年生はつい先月に面談を行ったばかりですが、それでも日頃の学習活動や生活状況など1か月間の状況報告をしてくれました。上級生は久しぶりの面談でもあり、現在の研究内容や就活状況、卒論や修論の進捗状況などについて報告してもらい、問題なく大学生活を送っている状況が伺えて、我々も安心したところです。

午後3時過ぎからの発表会では、1年生が1名、編入生1名、修士課程1名、学部5年生1名、3年生2名と計6名による発表が行われましたが、内、医学系が3名と、結局、医学系に偏ってしまいました。

今回の発表もスライド作成、発表と全体としても素晴らしく、奨学生たちの発表準備、発表技術、発表態度といったものが回を重ねるごとに上達しているのが実感として感じております。

今年度の九州地区研修会はこれで終了となります。計4回行いましたが、いずれもオンライン研修会となってしまったことは残念でもあります。奨学生の皆さんが発表や質疑応答を臆することなく行ってくれたことはオンラインの成果かもしれません。来年こそ、対面で顔を突き合わせ、研修会終了後には懇親会で大いに語りたいものです。

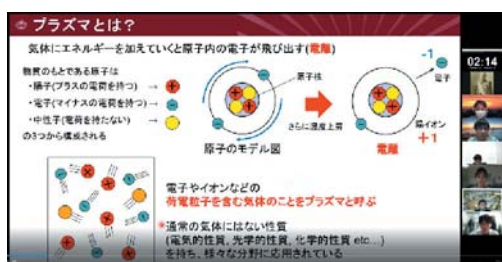
参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、八並理事（教育指導担当）、および野中理事（関西担当理事）

奨学生参加者：発表者および当日面談を受けた九州地区奨学生および山根奏太郎（関東地区）

（岡本）



参加者ギャラリービュー



原口学生発表スライドより



横山学生発表スライドより

研修会に参加しての感想

九州大学理学部地球惑星科学4年
高山 竜之介

今回研修会で皆様の発表を聞いて、先生方もおっしゃっていたが、皆様の発表の完成度がとても高いと感じ、とてもいい刺激を受けた。

パワーポイントのスライドに関しては、目次が発表内にあることで、発表の概要をつかめやすくなる工夫や、図や絵を大きく表示することで、とても発表が見やすく理解しやすくなる工夫、質疑応答の際に、パワーポイントの全スライドが画面に表示することで、迅速な質疑応答ができるという工夫がされていて、ぜひこの工夫を私の発表に取り入れたいと思った。

発表自体に関しては、発表の時間調整はもちろんのこと、難しい専門用語を言い換えたり、難しい内容やメカニズムをできるだけ噛み砕いて簡単に説明したりと、発表の聞き手の立場に立って考えて作られたものであり、とても内容が理解しやすかった。

また、発表の題材もプラズマやC型肝炎、アルツハイマー認知症など身近なものが多く、とても興味深いものばかりであった。さらに、単に発表の内容を紹介するだけでなく、自分の感想や考えを交えながら発表していた点もありとても面白かった。ほかには、発表に関連した論文や映画を紹介してくださる方がいてとてもいい工夫だなと思った。

個人的に横山さんのエニグマ暗号の発表がとても面白かったので、近いうちに紹介された映画を見てみようと思う。今回石崎さんの発表において、画面共有ができないというトラブルがあった。こういうトラブルがあったにもかかわらず、石崎さんは動揺することなく堂々とした態度で、とても分かりやすく興味深い発表をしてくださりととても素晴らしいなと感じた。このようなトラブルに対処することができたのは、石崎さんが何度も発表のリハーサルを行ったからだろうと私は思う。オンラインの発表ではこのようなトラブルも少なくないため、私も発表がある際は何度もリハーサルを重ね、どのような事態になっても対処できるよう、あらかじめトラブルを想定した準備をしようと思う。

大学院においても黒田奨学会の奨学生として採用していただき、研修会での発表の機会をいただくことができるならば、ぜひとも今回の皆様の発表を参考にして、万全の準備を行い、文理問わずにわかりやすく、そして発表を聞いてくださる方々の興味を引く内容をプレゼンしたいと思う。最後

になりましたが、様々な学問の知識を得ることができる貴重な機会を設けていただきありがとうございました。

広島大学医学部3年
田之上 絢香

今年度最後の研究発表を聞いて、多くの先生方もおっしゃっていたように、私が一年次に参加した時に比べて、全体の発表レベルが大変高くなっていると感じました。

発表者のみなさんは、専門的な内容を専攻が異なる人でも理解できるように、分かりやすく噛み砕いて説明する努力や工夫をしていました。全てを完全に理解することは難しくても、普段は触れることのないような分野に対し、基本的な知識を身に付けたり、興味を持ったりすることが出来ました。

パワーポイントも文字だけでなく、写真やイラスト、図が多く用いられており、見やすく整理されている印象を持ちました。私自身パワーポイントは時間をかけて制作しておりますが、よりレベルの高いものを作れるのではないかと思います。今後の自身の発表に活かしたいと思います。

また、みなさんがほぼ10分のタイマーと同時に発表を終えていたところにも好感が持てました。

個人的に、1番印象深かったのは原口さんのプラズマの化学についての発表です。発表内容について、少し説明いたしますと、まず第一に、プラズマとは固体、液体、気体に次ぐ第4の状態であり、荷電粒子を含む気体状態のことです。プラズマは電子や原子を放出する際に、光や色を放っています。自然界ではオーロラや太陽、雷として、身近では、蛍光灯内部に存在しています。蛍光灯中のプラズマ電子の温度は10,000度と大変高温ですが、低圧(密度が小さい)ため、蛍光灯を触っても火傷をしません。これは、80度のお湯だと火傷をしますが、80度のサウナだと火傷をしないのと同じ原理です。私はこの補足説明が大変わかりやすく、興味深かったです。最後に、原口さんが現在研究されている医療用の滅菌法や農業における種子の成長速度を促進する方法などへ、発表内容は発展していきましました。質疑応答でも全ての質問に対し、適切かつ十分な解説がありました。

石崎さんのC型肝炎に関する発表では、適宜イラストや図が入っていたり、色使いが明るかった、りと、パワーポイントの完成度の高さが非常に印象に残っています。このように発表内容が専門的かつ高度な分野でも、発表資料を工夫することで、聞き手の関心を引き出すことができると学ばれました。

松崎さんのアルツハイマーに関する研究発表も、大変興味深かったです。というのも私自身、来年から脳神経の分野で基礎研究をすることが決まっているのですが、研究内容を決めるときに、統合失調症、鬱病、偏頭痛、アルツハイマーなど臨床症状に対する研究も候補としてあがっていたからです。松崎さんの発表は、アミロイドβタンパクの蓄積がアルツハイマーの原因であるという一般的な仮説から始まりましたが、発表を最後まで聞くと、その仮説が覆されるような気がして混乱しました。やはり、脳神経の分野はまだ分からないことが多く、研究のやり甲斐がありそうです。

中田さんは上杉鷹山の教育改革についての発表でした。私は高校生の時に歴史を選択しなかったうえに、日本の歴史や文化に関する文系的な内容には普段殆ど触れないので、貴重な機会になりました。「成せばなる。成さねばならぬ何事も。」という有名な格言に始まり、上杉鷹山の教育改革は、彼自身の為人と江戸時代の社会情勢を反映したものであることがわかりました。上杉鷹山が福岡県出身であることや、優れた人材を第一に支援する制度を施行していたことから、黒田奨学会との不思議な縁のようなものを感じました。

福井さんの発表は、着床前診断、出生前診断の二つの検査診断をベースにした周産期医療における価値観についてでした。フランスでは着床前診断がごく一般的で、障害のある子を産むと、診

断の失敗と言われることもあったと聞いて心が痛みました。皮肉なことに、医療技術が進歩することで、ひと昔前の優生思想へと逆戻りしているような気がしました。医療現場では出産だけでなく、輸血やホスピス、癌治療などの終末期医療など、あらゆる場面で倫理観が問われることがあります。その際に患者の意思を尊重することも大切ですが、そのことが命を軽んじたり、障害を持って生まれた方など罪のない人の権利を侵害することに繋がったりしてはいけません。私達が医師になる目的は人命を救助し、人権を守るためであるという大前提を忘れずに、最善の決断を下せる人間である必要を改めて感じました。

最後は横山さんの発表で、エニグマ暗号機の仕組みについてでした。エニグマ暗号機とは第二次世界大戦で実際にドイツが用いた暗号機です。インターネットを安全に使用するためには“暗号”が不可欠であるという導入で、暗号の歴史やエニグマ暗号機の暗号化と複合化の仕組みについて説明していただきました。エニグマ暗号機でさえ、煩雑な機械や方法をとって暗号化がなされているのに、現代はさらに暗号技術が高度化されていることには大変驚かされました。

自分が発表しない研修会に参加するのは久しぶりでしたが、学問への見聞を広げるだけでなく、自分の発表にフィードバックすることもでき、大変実り多い時間になりました。

公益財団法人黒田奨学会に対する寄付御礼 および 寄付継続のお願い

従来より黒田奨学会からお願いしています御寄付ですが、お陰様で令和3年度前期、10月31日現在で44万4千円となっております。

瑞藤会会員の皆様、および、当奨学会の理念にご賛同・ご支援を頂いている皆様には改めてお礼申し上げます。と同時に今後も引き続き、当奨学会への御協力を心からお願いする次第です。

よろしくお願いいたします。

公益財団法人・黒田奨学会理事長
伊達 健太郎

令和3年度奨学会基金への寄贈者（敬称略、順不同）

令和3年4月1日～令和3年10月31日 （ ）は黒田奨学生OB、OGの卒業年

今 藤 久 夫	松 下 陸 (R3)	深 見 正 仁 (S60)
今 藤 恵 子	吉 田 隆 治	石 津 宗 久 (H1)
土 屋 雅 彦 (S53)	山 下 謙	仲 野 美 穂 (H28)
久保田 康 史 (S43)	山 田 公 彌	奈良崎 修 二 (S55)
井ノ口 正 浩	久 保 健 二	
安 部 大 輝 (R2)	三 戸 道 雄	
宇 土 至 心 (H15)	谷 耕 輔	
井ノ口 功 基 (H28)	中 村 義 則 (S61)	
木 下 実 花 (H30)	吉 田 修 一	その他 匿名希望 12名

編集後記

今号の巻頭言は私の高校先輩で同じ医療系専門学校の非常勤講師を務められている竹下氏にお願いしました。福岡市の教育に長年貢献された先生、80歳半ばのお年ですが、日頃お逢いする際にも教育への情熱を感じさせられています。今回のテーマとなっている案内状の返信はがきは日常生活では経験することですが、せいぜい‘行き’を‘様’に書き換えるくらいで相手の思い遣りなど考えることなく投函することが多かったことを反省しています。日頃の些細な行動でも「相手の立場に立つ」という思い遣りは忘れたくないものですね。

長年、黒田奨学会に貢献いただきました3名の理事の方々、本当にご苦勞様でした。改めてお礼申し上げます。実は久保田、久野、両先生とは黒田奨学会の同期入学生、同年齢です。私の方、理事経験がまだ3年足らずと浅いとはいえ、お二方が理事を辞められて私だけがまだ理事として残ることに複雑な思いを抱いているのですが、もうしばらくは頑張るつもりですので、改めてよろしくお願いします。なお、コラムは元副理事長の馬頭氏によるもので今号が最後のコラムになることをあえて付記します。

「福岡藩由来の教育機関の変遷」は今号でひとまず終わりとなります。黒田藩が如何に藩の教育に努めてきたか、垣間見る事ができたのではないのでしょうか。田中理事、お疲れさまでした。

今号の初企画として、現奨学生の毎月の近況報告から抜粋したいくつかの報告を掲載し、また瑞藤会会報用に投稿してくれたエッセイも掲載しました。毎月送られてくる60名近くの奨学生の近況報告を読み、一覧表に整理する中で、奨学生の生活状況を知るだけでなく奨学生個人の‘人となり’といった一側面にも触れることができる思いを毎月しております。教育指導担当理事として、奨学生とのコンタクトを深める一助にしたいものです。

コロナ感染拡大が抑えられている中、海外留学が認められるようになってきており、会報でも久しぶりの海外留学報告を掲載できました。コロナ感染リスクを克服しての海外留学です。藤井奨学生の活躍を期待しましょう。そして、福岡でもコロナ感染者が急激に減少しています。令和3年11月9日の福岡市感染者はゼロ、やっと！という感じです。最初に感染者が出て以来、二年近く経っているのでしょうか。今後も感染予防にはくれぐれも注意を払っていききたいものです。

ということで、令和3年、2021年も終わりに近づいてきました。少々早いですが、来年は奨学生の皆様と対面でお逢いできること、また総会開催を実現して瑞藤会の皆様ともお逢いできるようになることを願いながら、編集後記といたします。

令和3年12月中旬
編集責任者・岡本順子（常任理事）

黒田奨学会研修会・発表抄録集

第1回九州地区研修会 令和3年6月5日

1. Is our universe living on the bubble ??

九州大学理学府物理学専攻・博士2年
古賀 一成

ここ20年で宇宙の観測技術は飛躍的に向上し、宇宙の加速膨張の発見、重力波の直接観測、ブラックホールシャドウの撮影など成功を収めてきた。それとともに、理論的な理解も進み、超弦理論という究極の理論の候補が議論されている。しかし、この超弦理論の枠組みの中で、観測と整合する宇宙を構成するのが一般に困難であることが知られている。今回は、この問題を解決する1つのモデルである、バブル宇宙について紹介していく。

2. 様々な因子が新型コロナウイルス感染者数に与える影響についての分析

九州大学工学部地球環境工学科建設都市工学コース4年
小山田 莉緒

昨年後期の「都市計画」という授業で、福岡市における交通整備の人口増減への影響について分析しました。福岡市の人口や駅数、空港の離発着数のデータをもとにRというソフトウェアで行った回帰分析が、昨年から猛威を振るう新型コロナウイルスについても用いることができると考えました。今回は、回帰分析とは何か、そして「様々な因子が新型コロナウイルス感染者数にどのように影響しているのか」について新たに分析しましたので、その結果について考察を加えて発表します。

3. 新型コロナウイルス感染症

九州大学医学部医学科6年
前田 優華

2019年12月に中華人民共和国武漢市で報告されて以来、現在も世界で新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)の感染拡大に歯止めがかからない状況が続いています。そんな中、私は病院での実習で、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の患者さんを受け持ちました。実際はどういう経路で感染し、どんな症状が起こりうるのか、治療はどうするのか、また、現在ご高齢の方に接種が行われているワクチンについて等、少しでも皆さんの役に立つような話ができればと思います。

4. 地震波からマグニチュードを計算する

九州大学理学部地球惑星科学科4年
高山 竜之介

昨年私が履修した「地震学」という授業で、地震波のデータがあれば、その地震のマグニチュードをエクセルによって計算することができることを知った。そこで、この非常に興味深い方法について、ぜひとも奨学会の皆様へ発表したいと思ってこのテーマを選んだ。発表では、地震波から計算に必要なデータを得る方法や、マグニチュードを求める時に使う関数、さらには、それらを用いて実際にマグニチュードを計算した結果についても話したいと思う。

5. 日本の洋装マネキンの歴史

九州大学文学部美学美術史研究室3年
小倉 菜穂

衣料品店でよく見かけるマネキンですが、その姿は時代によって大きく変わります。技術の進歩による素材的・品質的な変化はもちろんのこと、制作において当時の生活や美的感覚に強く影響を受けるマネキンたちは、各時代の人々の理想を映した鏡としてその容貌を異にするのです。今回の研修会では、そのようなマネキンの変遷を、国内初の洋装マネキンの誕生から現代のマネキン事情に至るまで、業界の変化やマネキンの写真を交えつつご紹介いたします。

6. オーストラリアの選挙制度について

九州大学法学部3年
首藤 春風

現在、日本の衆議院選挙において小選挙区比例代表制が用いられていることについては、義務教育や高校教育の中で何度も聞いた方が多いかと思います。しかし、世界では日本とは異なる様々な選挙制度が用いられており、その中から今回は個人的に参考となる点が多いと感じたオーストラリアの選挙制度について取り上げることにしました。オーストラリアの選挙制度の概観やメリット、デメリット等について発表をさせていただきます。

第2回九州地区研修会 令和3年7月17日

1. 自励振動とその対策

九州大学大学院工学府機械工学専攻博士後期課程2年
末田 美和

研究内容については学会誌に投稿中のため、今回は私の専門分野・機械振動学でよく取り上げられる自励振動について紹介します。自励振動とは、振動的でないエネルギーがシステム内で振動的なエネルギーに変換されて発生・成長する振動です。機械の設計・開発にあたっては予期せぬ自励振動の発生に苦しむことが多く、自励振動の対策が必要不可欠です。今回はこの自励振動の具体例とその対策方法について紹介します。

2. 心身症と自律訓練法

九州大学医学部医学科6年
龍 正一郎

心身症とは、ストレスやストレス耐性が症状に影響しているような身体疾患のことをいい、代表的な疾患には過敏性腸症候群や機能性ディスペプシア、頭痛、疼痛性障害があります。私が実習で経験した、ストレスによって疼痛が引き起こされた症例を取り上げ、ストレスが身体に影響を与える心身症の病態について説明します。そして、ストレス対処

法の1つである自律訓練法について紹介し、皆さんにも体験していただきたいと思います。

3. 命の価値計算

九州大学経済学部4年
小石 健仁

命の価値については様々な議論があります。もちろん、道徳的には命の価値はお金で決められないというのも一つの結論であると思います。しかし、労働経済学の観点では命の価値を金額で求めることができます。今日の発表では、命の価値計算について前提となる考え方から丁寧に説明したいと思います。この内容は私が留学先のベルギーで学習した内容で、経済学の面白さを再認識するきっかけになったものでした。皆さんにも、経済学に興味を持つきっかけにいただければ幸いです。

4. 仏師・快慶の制作活動

九州大学文学部人文学科3年
高瀬 佳奈

快慶とはどんな人物だろう？ 多くの人は「鎌倉時代の初めに運慶と共に活躍した仏師で、慶派仏師として武士に好かれる迫力のある作品を作った。」というように、運慶とほぼ同一視した説明を思い浮かべるのではないだろうか。しかし、実は運慶と快慶は出自も作風も異なる。運慶は慶派の嫡流であるのに対して、快慶は傍流であり、作風も一言で表すと「優美」や「流麗」である。快慶の制作活動についての今回の発表から快慶の解像度を上げてみたい。

5. 肘にネズミが住んでいる！？

広島大学医学部医学科3年
田之上 絢香

私は成長期に過度な運動をしたことにより、小学四年生の頃にオスグッド・シュラッター病という膝のスポーツ傷害を発症し、長く悩まされていました。又、同じように、私の父も肘のスポーツ傷害を患い、肘関節内の軟骨を取り除く手術を受けました。今回はそのような私自身の経験と大学で受けた整形外科の講義にヒントを得て、スポーツ傷害の中でもメジャーであり、かつ話題に富んだ、“野球肘”についてお話しさせていただきます。

6. ウィーンブリッジ形発振器について

九州大学工学部電気情報工学科3年
山田 健太

発振器とは直流の電気エネルギーから必要な周波数からなる交流の電気エネルギーを持続的に取り出す装置ですが、特にその中で、正弦波発信回路という回路は、信号伝送のための搬送波発生や、様々な試験信号の発生などに広く用いられています。6月の実習実験において、ウィーンブリッジ形発振器という正弦波発信回路を作製しましたので、その結果やそれに対する考察を踏まえながら、発振器の仕組みについて説明します。

関西地区研修会 令和3年9月4日

1. 緩和ケアとは

名古屋大学医学部B6
矢野 礼智

名古屋市の愛知県がんセンター病院の緩和ケア部で1ヵ月間の学外実習を行った。緩和ケアとは病に起因する深刻な身体的・精神的苦痛を持つ患者やその家族に対して行う、積極的かつ包括的なケアであるが、社会的な痛みや霊的な痛みに対してもケアを行うものである。この実習を通じ、緩和ケアとは何か、患者やその家族に対してどのように接し向き合うのか、また、緩和ケアの提供者は全ての医療従事者であることなどを体感的に経験し、今後も緩和ケアへの認識を深めていきたい。

2. 歌劇『イリス』の中の「日本」 — ギリシア神話との関わり —

京都大学文学部人文学科西洋文化学系イタリア語学イタリア文学専修B4
小河 義典

歌劇『イリス』（1898、音楽：P.マスカーニ/台本：L.イッリカ）は、イタリアオペラ史上初の日本を舞台にしたオペラである。登場人物や台詞、台本のト書き、楽器の音色など、日本を描き出そうとする試みは随所に見られるものの、ここで描かれている「日本」は、西洋人視点の未知なる世界に過ぎない。本発表では『イリス』とはいかなる作品であるのか、西洋文化の伝統的なテーマであるギリシア神話との関わりから考察する。

3. 男子大学生の同調的被服選択行動と自己意識について

—アイデンティティとキャラクター概念に注目して—

京都大学教育学部教育科学科B4
窪田 璃駆

先行研究によれば、ファッション行動におけるジェンダー差は明らかであるが、近年の若者のファッション行動に関する研究の動向をみると、その特徴は、「女性のファッション行動に着目、」それに関する外部要因から説明、という2点に集約されている。そこで、卒業研究を通して、男性のファッション行動、特に男性に特徴的な同調的被服選択行動のメカニズムを紐解くことを目指し、アイデンティティやキャラクターといった独立変数に注目し、自己意識の点から考察を試みる。

4. ROICを使った企業研究 — ミニストップの営業利益率が下がった理由を探る —

京都大学経済学部B3
原 知輝

企業の財務状態を測る指標の1つとして、近年注目を浴びているのがROIC（Return On Invested Capital、ロイック）である。このROICを用いて、成長業界にありながらも経営悪化の道を辿るコンビニチェーン「ミニストップ」の財務状態を分析した結果、経営悪化は原価率の上昇によるものだという結論にいたった。さらにこの分析を基に、原価率上昇の要因について定性的な情報を踏まえながら、「ミニストップ」の施策や供給システムという観点から考察を加えた。

5. 放散虫化石による地層の年代測定

京都大学理学部B2

榎藤 洗人

京都市北部を流れる岩倉川と高野川の合流地点付近で確認されたチャート地層について、中に含まれる「放散虫」の化石から地質年代の測定を試みる。【方法】地層から岩石を採取・粉碎して粒子化した後に実体顕微鏡を用いて取り出した化石を電子顕微鏡で詳しく観察し、その形状から年代を推定する。【結果】いくつかの放散虫について種名・属名が判明した。【考察】チャート層は恐竜が多様化した時代の三畳紀中期～後期のものであることが分かったが、地層ごとの厳密な年代や層序の解明には至らなかった。

6. 都市緑地が有する効果とその経済評価

神戸大学国際人間科学部環境共生学科B2

高田 早紀

都市内に存在する緑地は重要な生態系サービス源として機能していますが、実際には緑地の価値が考慮されずに都市開発が進められているという現状があります。緑地の価値を可視化するためには、それを貨幣単位で評価することが必要です。緑地が有する効果に焦点を当て、緑地を含めた環境のような非市場価値を経済評価するにはどのような手法があるか、また、その手法はどのような場面で用いられているか、などの課題について発表します。

7. 古都・京都の都市計画について

京都大学工学部建築学科B2

徳村 夏輝

日本の各都市で行われている都市計画は、都市の作り方やその目的に加えてそれにかかわる法律など、一般的には多岐にわたっている。しかしながら、古都である京都は一風変わった都市計画がされており、今回はこれを紹介する。京都という町を作り上げ、維持するために、今どのような取り組みが行われているのか、そして京都の発展とその維持を行うために必要とされる今後の都市計画とはどのようなものであるか、私見を交えつつ発表する。

8. 放射線の素朴

大阪大学理学部物理学科B2

山田 和輝

東日本大震災が発生した後、原発からの放射線漏れは大きな被害を日本にもたらしました。肉眼で放射線を見ることができないため、放射線について深く考える人が増えたのは原発事故の報道以降でしょうか。しかしながら、放射線に関する正しい知識を持っていないければ報道を正しく理解することができず、誤った判断や行動をしかねません。今回の発表ではほんの一部ではありますが、放射線に関する知識を紹介し、今後の放射線への理解を深め、放射線報道に関する議論にも役立てて欲しいものです。

9. 公認会計士について

神戸大学経営学部経営学科B1

今井 琴海

大学学部で受けた会計プロフェッショナル育成プログラムの中で、特に簿記の講義に興味を持ち、さらにその中でも職業としての公認会計士について強く興味を持ったことから、今回のテーマを選ぶことにした。公認会計士はどのような仕事をしているのか、公認会計士になるための試験はどのようなものなのか、試験に合格するためには何が求められ、必要とされるのか、また、今私が公認会計士を目指すとしたらどのような行動をとればいいのか、など、疑問を解決すべく調べた内容を発表する。

10. アルツハイマー病と生体分子イメージング

京都大学薬学部B1

宮崎 結生

超高齢社会である日本では、アルツハイマー型の認知症患者が年々増加している。この病を早期発見できれば、進行を遅らせたり症状を軽くしたりできる。私がこの発表テーマを選んだ理由は、アルツハイマー病の早期発見に生体分子イメージングが有効だからだ。生体分子イメージングでアルツハイマー病発症と相関がある物質の沈積を可視化することで、アルツハイマー病の早期発見が可能となり、さらには、今後、創薬の際にも有用性が大いに期待される。

第3回九州地区研修会 令和3年10月9日

1. 印刷技術を用いた新規光デバイスの作製に関する研究

九州大学大学院システム情報科学府電気電子工学専攻 修士2年

小幡 ナシム

近年、印刷技術による光デバイスの作製が注目されている。新聞に文字を印刷するように、基板に素子を配置するこの技術は、環境に限定されないプロセスの柔軟性から様々な可能性が期待されている。私は、この印刷技術により、ペンで紙に絵を書くように、インクを多孔質な膜に浸透させ光デバイスを作製する新規手法を提案し、研究してきた。今回の発表では、その成果について報告し、新規性や将来への展望について紹介する。

2. 「図形」を学んで何になる！

九州大学理学部数学科3年

矢ヶ部 稜

「東京タワーとスカイツリーが、同じ高さに見えるのはどこか？」これは、三角形の相似を用いれば答えられます。この問題から分かるように、「図形」は、面積や高さを求める際に使われます。「それだけかよ。」そんな声が聞こえてきそうですが、もちろん違います。映像技術にも図形は応用されているのです。今回は、図形を学ぶこと、用いることで、どんなことができるのか。最先端技術に欠かせない「幾何学」について、紹介しましょう。

3. モノの名前にとらわれずに ― ライフハックから学ぶこと ―

九州大学医学部保健看護学科1年

新井 花奈

便利なモノに囲まれている私たちは、日々の問題に対して自分の想像力を使う機会が少なくなっている。今回は、自分の想像力を働かせてみると何がわかるのかということに絞って、日々の「困った」を身の回りのモノで解決する事例を

ライフハック（生活の知恵）の中から探ってみるという方法をとった。その結果、「私たちはモノが持つ名前によって想像力が制限されている」ということが分かったが、さらにはモノの名前ではなく、そのモノ自身にも焦点をあててみる。

4. 佐賀平野におけるクリークの役割

佐賀大学教育学部1年
川邊 遊

佐賀市での浸水が毎年繰り返されるのはなぜ？ その疑問に応えるべく、佐賀平野の地形と治水の点から調べてみた。干拓によって造られた佐賀平野では、排水と取水を目的にクリークが張り巡らされているが、その水量は潮の干満の影響を受け、満潮時の大雨は排水機能低下から市中の浸水につながる一方、貯水能力によって浸水被害は抑えられる。景観の特徴でもあるクリークの機能や馴染みある風景の果たす役割について興味を持っていただきたく、社会科教育に携わる立場から発表する。

5. 計算機に耳はあるのか

九州大学工学部電気情報工学科1年
工藤 雅人

前期授業の中で基礎的なことを学んだ「python」について理解を深めるために、現在多くの場面で活用されているプログラム例である音声解析の再現を試み、さらに研究を行いました。声を録音して処理することで音素の相違点を検出し、簡単な音声解析・判定プログラムを作ることが出来ました。また、結果から、データ上のイレギュラーな箇所に対応するための一般的な音声認識にはAIが用いられている可能性についても考察しました。

第4回九州地区研修会 令和3年11月13日

1. プラズマの科学 ー身近なプラズマから産業応用までー

九州大学総合理工学府・先端エネルギー理工学専攻 修士2年
原口 義基

「プラズマ」というワード、あまり聞き馴染みのない言葉かもしれませんが、実は私達の身の回りに意外と多く存在しています。光を放出する・化学反応を起こすといった様々な性質を持っており、エネルギー・宇宙開発・環境改善など、多岐にわたって応用が期待されています。今回は、まずプラズマの原理や性質について解説していきたいと思います。そして、オーロラなどの自然現象から生活での活用例、さらに医療分野への応用例について紹介します。

2. C型肝炎について

九州大学医学部医学科5年
石崎 菜々子

大学病院での実習で様々な病気を見聞きしたが、その中で最も心に残ったのがC型肝炎だった。「医療は急速に発展している」と言われても今まであまりそれを感じたことがなかったが、C型肝炎の話を聞いて初めて急速な医療の発展を実感することができた。そこでC型肝炎の発見～治療までを通して皆さんにも医療がどれほどのスピードで発展しているのかを実感してもらいたいと思い、このテーマで発表する。

3. アルツハイマー病新薬「アデュカヌマブ」の臨床試験結果と社会に与える影響

九州大学医学部医学科3年
松崎 広太

今年6月、FDA(アメリカ食品医薬品局)がアルツハイマー病新薬である「アデュカヌマブ」を同病治療薬として承認しました。同病に対する新薬承認は18年ぶりであり、この承認は歴史的な出来事と捉えられています。しかしこの新薬承認は、臨床効果や社会に与える影響など様々な面で物議を醸しているのも事実です。今回は臨床試験結果の論文から見た薬剤の効果や、新薬承認が社会に与える影響などについて説明できればと思います。

4. 江戸時代の名君上杉鷹山の教育改革

九州大学文学部3年
中田 蓮太郎

財政窮乏、農村の荒廃、家臣の墮落。このような状況に苦しみ、一時はお家取り潰しの危機に瀕した上杉家を救ったのは、第九代上杉鷹山であった。彼が行った改革は多岐に渡るが、今回はその中でも教育改革に注目する。藩政改革のなかに教育改革を取り入れ、人材育成を行うことによって藩を再建した上杉鷹山が行った教育改革とはどのようなものであったのか。今回は江戸時代上杉家における武士としての学問・教育の姿について紹介する。

5. 私の中のあなた

佐賀大学医学部1年
福井 優子

医療技術の発達により、誕生する前の受精卵に対する着床前検査と胎児に対する出生前検査は日に日に充実してきている。これらの検査によって、生まれてくる子供の病気や障がいを知ることが可能となった。しかしここには、倫理的な問題が深くかかわっている。妊婦はなんのために出生前検査を受けて、その診断結果をどのように受け止めているのか。着床前、出生前検査の仕組みと日本における現状、さらに海外での現状を紹介したい。

6. エニグマ暗号機の仕組み

九州大学工学部電気情報工学科計算機課程3年
横山 健

現在欠かせないものとなっているインターネットにおいて、重要な役割を担う暗号にはさまざまな歴史がある。その歴史の中でも第二次世界大戦中に用いられたエニグマ暗号機は、簡単な仕組みでありながら作成される暗号の組み合わせ数は、人が解読できる量をはるかに超えている。今回の発表では、暗号解読が人からコンピュータへ移り変わるきっかけともなったエニグマ暗号機の仕組みについて解説し、暗号に興味を持つきっかけになればと思う。